女鑑

（毎月二回　五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）

明治三十三年九月二十四日發兌

第貳百拾柒號

國光社

女鑑第貳百拾參號

目録

若松の阿仙

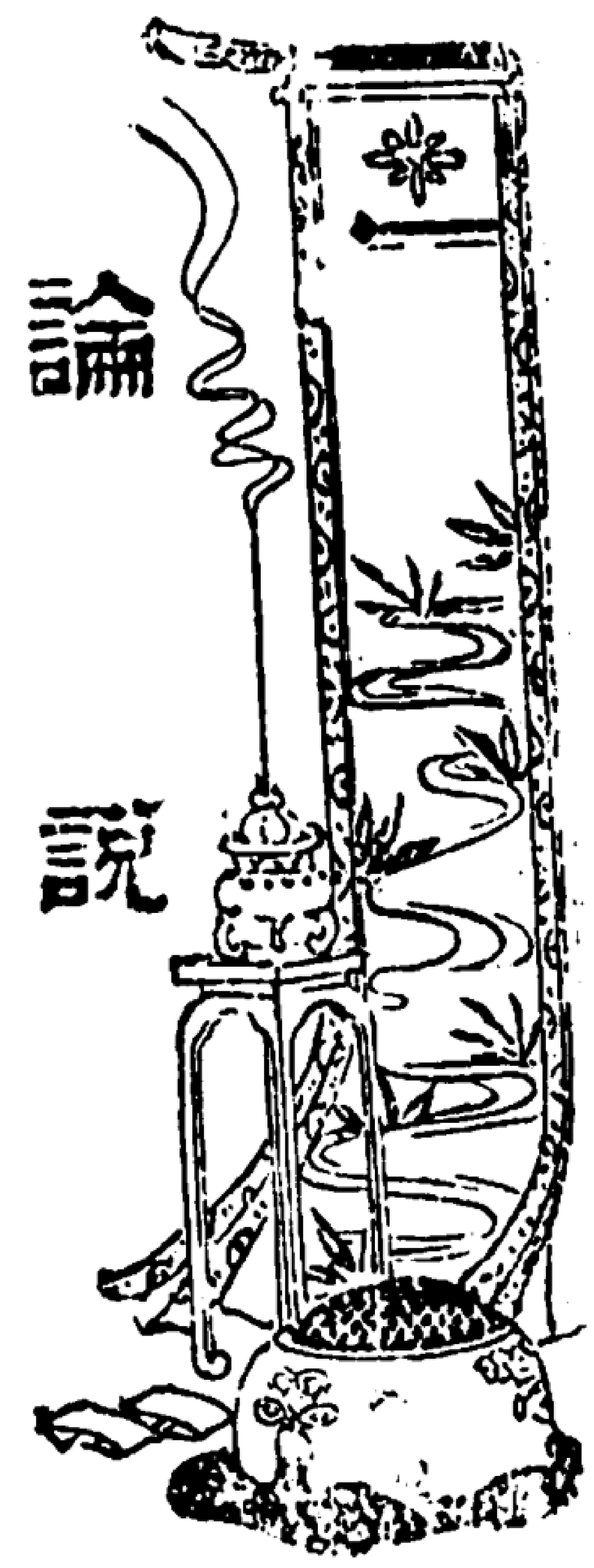


先づ我が古を稽へよ

北京籠城に於ける、わが日本婦人の行動が、決して、國家の面目を汚損せざりしことは、其の後の通信、若しくは、籠城婦人各自の談話等によりて、明白に證明せられたり。これ、固より、然あるべきことにして、敢へて、今更に、慶祝すべきほどのことならざれど、たゞ、しかしながら、この問題につれて、國家の面目のために、一の悲むべきもののあることを認めざるを得ざるものあり。即ち、世間の或る部分には、いまだ、醇美なる日本固有の女教を認識すること能はざるもの有ることと是なり。

其の他の總べてに對する倭歐の弊風は、疾くより、排斥せられたるにもかゝはらず。婦人に關してのみは、何故に、いまだ、この弊風を排斥する能はざるか。既に、北京籠城婦人に關する誤れる通信について、評論せるものゝ中には、歐州婦人を仰羨して、我が古來の女教に慊焉たらざるの意を示せるもの尠からざりき。

而して、世人は、毫も之を異とせざりしなり。他の長をとりて、我が短を補はむとするの注意は、須臾も怠るべからず。然れども、我が長を擲ちて、他の長短を併せとりて、これに代へむとするの愚は、決して、學ぶべからざるなり。西洋婦人を摸倣するにあらざれば、わが日本婦人は、事あるにあたりて、これに處するの勇氣なきか。西洋風の教育を受くるにあらざれば、義侠心あること能はざるか。慈善の心あること能はざるか。刻下に於ける區々の例證を擧げて論ずることを爲せず、之を、我が國の歴史に稽へよ。彼等の如く輕佻ならざれども、眞誠の勇氣は、わが國婦人の最も尙ぶ所のものにあらずや。彼等の如く名を衒ふにあらずして、國家のため、人類のため、其の身を獻げて仁を爲すは、古來、わが國婦人の最も快とする所のものにあらずや。而かも、至淑至順の徳を備ふるもの、即ち、我が國婦人の最も榮譽とする所のものにあらずや。斯の固有の女教を發展することを努めずして、無暗に摸範を他に求めむとするが如き、其の陋愚は暫くおき、事、はなはだ、國家の面目に關するものあることを悲まざるを得ざるなり。



論説

理想の婦人（下）

三輪田　眞佐子

且つ智情意の發達、能く當を得んか。智は現れて眞となり、意は行はれて善となり、情は動きて美となるべし。實に一身にして眞善美の具備したる婦人こそ、われら女界の理想に適當するものなれば、われ女子と生れしものは、一歩たりとも、この理想に近づかんことを日に月につとめざるべからず。

莊子曰く、狗は善く吠ゆるを以て良となさず、人は善く言ふを以て賢となさずと。信に人は、をさをさかゝる婦人もがな。かゝる女子こそ、各思ひしに、理想を描がゝざるものなからん。讀者も定めて嫁ぎては、かゝる家庭を作らん友に向ひては、かゝる交際をせんなど、一種の理想を懐くならん。されど思一思せよ。言ふのみにては、未だ賢とならず、これを實現してこそ、始めて賢婦人といふべけれ。

蓋し、眞善美を實行に現はさんとならば、明と和と潔とを含む品性を作らざるべからず。如何となれば、明ならざらんか、眞僞を判分すること能はず、和ならざれば、天の如く寬大に、地のごとく慈愛なる至善を發表すること難し。亦、その品性潔ならざる人は、物の美醜を差別するに適せざるべし。

されど、注意すべきは、明とは、些々たる小節のみに、區々と拘泥するを尊ぶにあらず。事理の大

網に惑はざる意なり。和とは、柔弱為すあるに足らざる無能の意にはあらず、温顔以て、婦人の天職を盡せば可なり。潔も、亦、潔癖と稱する惡習にはあらず、純然として、汚濁なき趣味なり。讀者似て非なるものを見て誤解なし給ひそ。

されば、女子を教育するものも、亦、教育せらる女子、自らも、專ら智情意の心力全體を、適當に同和するやう養成せんことをつとめざるべからず。若し、智情意の調整を失はんか、決して完全の婦人といふこと能はざるべし。たとへば、病むものを見て、あなと泣き、貧しきものを聞きて、哀を催する婦人も智なくして、眞を認めざるため、一種の迷信を起し、蛇を拜し狐に祈るごとき愚のわざを爲すものありとかや。亦、智は、古今の成敗を說き、東西の學理を講する婦人の目に、一滴の涙なく、心極めて冷かなるものは、などか恩愛の源なる天職を全うするを得ん。亦、美的の趣味も樂しき家庭を作るに欠くべからず。

要するに、智情意を適當に養成して、眞善美の具備する品情を作り、以て、第一に、良人へ對する義務を果して次ぎて、女道を踐みて、家族一同に向ひて任務を盡し、なほ交際も、眞善美の範圍を離れざるを期すべし。果して、内に洋々たる眞善美の盛德積らんか。おのづから溢れてゆかしき言語となり、仰げば、いよ〳〵高き動作となりて、人をして此の世ながらの天女と敬服せしむること難きにあらざるべし。

日本女學校始業式に臨みて

三輪田眞佐子

本日當校の始業式を行ふにつき、殘暑のなほ甚しきに拘らず、生徒の父兄の御方、幷に、保證人の御方に御足勞を煩はした次第は、先づ本校の趣旨を申上げ置く必要あると同時に、家庭に於ける御注意を促したいと思ひましたからでござります。

本校は、去、六月を以て設立することになり、八月廿五日を以て、第一學期、即四月より七月までの學力試驗を行ひ、此にて各生徒は、第二學期に編入せられる、順序となりました。由て、今日を以て、入學式を行ひ來る三日より、愈始業することとなりました。

近來女子教育が、漸々盛となりましたのは、女子に生れし身分の吾々に取りて、仕合なるのみならず、國家のため、大に賀すべきこと、信じます。其は國民の半は、女子であるから、男子の教育と相待つべきこと、恰も車の兩輪の如く、偏廢することの出來ぬ道理で御ざります。殊に、社會の根本なる家庭を主るものは、女子の任にて、女子に、十分なる教育がなくては、兒童の教育、家族の團欒一家の衛生經濟、及び、交際等の任務を全くすることは出來ませぬ。

右の次第なるを以て、昨今府下に於て、陸續女學校の設備あるは、實に嬉しきこと、存じます。猶私は、學校の數が增加して、府下の各區毎に、是非とも、一つ以上の女學校が欲しく存じます。如何となれば、女子は、男子と異りて、遠方に通ふことが不便なると、なるべく、家庭より通學するを良とする必要あるを以て、諸所便宜の地に女學校

が入用と存じます。此より、市民擧りて、女子教育に盡力せられんことを望みます。

斯くして多數の女學校ありとするも便宜なる所に行きて、女子の智徳を修むることが出來ます。就中、種々學校があると、其の學校の目的と特色に應じて、父母方が、女子に希望通りの教育を加ふることが出來ます。

本校の目的は、所謂良妻賢母となり得る資格を作るにあるを以て、文部省の高等女學校令の通りの學科を課する積でござります。されど例令ひ同じ學科を課するとするも、學校の精神に由りて、運用の効に特色を生ずることとならんと思ひます。即ち。本校は、日本固有の女徳を養ひ、以て、着實と質素に教育する積であります。其は、本校主、兼校長西澤之助氏は多年勤王の志を有し、愛國の情深き御方なるを以て、兼て、女學校を起し、完全なる日本婦人を作りたき御宿望なりしが、愈本年を以て、實行することゝなりました。

扨て、女子教育のことは、言ふは易くも、行ふは難きもので御ざります。如何となれば、單に學術を授くるのみにても、眞の教育とは申されませぬ。元來特別に學者になる女子とか、教師になる女子とかは、兎も角、高等女學校風の教育に於ては、良妻賢母となる實力を養ふことが肝要であります、故に總て實踐をつとめねばなりませぬ。由て、學校と家庭と脉絡を通じ、方針を一にし、以て、大成を期すべき者と信じます。故に家庭に於ても、十分、御注意を願ひ度ぞんじます。今二三例を擧ぐると、洒掃應對の實地、裁縫及び、割烹の演習、父母に對する孝養兄弟姉妹に對する心得、婢僕を御する注意等は、學校に於て、十分訓戒するも、家庭の御注意は缺ぐことの出來ぬもので、御ざり

ます。されど、人倫の大道を指示し、新智識を給與する如きは、學校にあらざれば、目的を達すること難しと信じます。勿論敎師も、其の操行言動、悉く模範を以て任ずべきものと存じます。斯る理由を以て、通學簿なるものを作り、生徒に渡し置き、學校と、家庭の連絡をつけて、共に共に勉勵して、美事なる女子を作らんことを望みます。今更二ッ三ッ父兄の御方保證人の御方に申上げ置き度きことは、

一、生徒の居所に御注意を願ひ度、御自宅に御出の方にても、生徒たるもの丶、御出入、御交際抔に、御注意を願ひます。殊に、他人の家に寄寓する地方などの生徒は居所を御撰擇ありたく存じます。

一、女子は、十四五才十七八才の間は、最も身體の發育上、大切なる、時なるを以て、日常の衛生に御注意あるは勿論、試驗前などに徹夜などして、衛生を害せざるやう願ひます。固より勉學は大切なるも身體を害しては、敎育の目的に違ひます。由て學校に於ては、常々絶えず適當なる勉學をつとめさせて、一時勉强などせざるやう試驗法を設け、而かも、其の結果は、俄に試驗勉學するより、實力を有するやう致し度く存じます。即ち試驗は臨時に致し、日課點、即ち平常點に重を置きます。

一、全體日本の女子は、體質が弱きは缺點でありますから、家庭に於ても、運動飲食等に御注意を願ひ度存じます。

一、衣服は、清潔にすることは必要なるも華奢なることはなき様に願ひます。追つて學校より制服を定めて申上げます。制服は御面倒なることなるも生徒たる體面を思ひて、精神上、

並に言語に注意する一端となります。又、一般の奢侈を競ふ惡風を免るゝことゝ存じます。

一、生徒の途寄は、固く戒むべきを以て、家庭、若くは、教師の許可なき限は、一切途寄すべからざることに致し度し。

右の外通學心得を、能く〳〵御覧置きを願度存じます。

猶申上度事多きも暑さのことなるを以て、餘り、長々しきは御迷惑なれば、此にて置きます。併し、これより後も、時々折を得て、父兄の御方、若しくは保證人の御方々と教育のことを相謀り度く存じます。

婦人と勞働（承前）

紅村生

如何にして生活すべきかは、人生劈頭の問題にして、其の職の高卑を問はず、社會の良民として、世に立たんと欲するには、先づ生活の計を爲すに於いて、何んぞ貴賤貧富を論ずることをなさんや。彼の衣食足而知禮節とは、能く、此の眞理を説明せると言ふべきなり。

明治二十七八年戰役以來、我が工業界の膨脹と物價の騰貴は、勞働者に向うて、一大恐怖を與へたり。一時は、可憐なる男女の兒童、及、其の父母を驅りて勞働の群に投じ、營々として衣食の計に疲れしめ、家庭の快樂、及び、教育の如きは、地を掃ふの有樣にして、心あるものをして、轉々悲しみに堪へざらしめたり。爾後幸にして、我が政

府は、工業條例實施に鋭意せらるゝことを聽けり。吾人は、此の條例の當を得て、我が紛亂せる工業界の風紀を刷新することの、一日も、その早からんことを待ちつゝあるなり。

工業の進歩と共に、婦女勞働の增加するは勢免ぬかる可からざることとなるも、世に一種の社會主義を唱ふるものあり。人は太初より平等なり。貴賤貧富の階級なる者の存在するは、社會制度の誤謬なり。この制度を破壞し、總べての人を平等となし、所謂無差別なる共產主義を實行すべし。勞働は、神聖なり。男女、固より同權、其の爲す所決して、差異ある可からずとて、頻りに、歐米に於ける社會問題を叫び、以て婦女の勞働を勸むるに泰西に摸倣するを以てせんとせり、今、彼の國に於ける最近婦人の職業を擧ぐれば

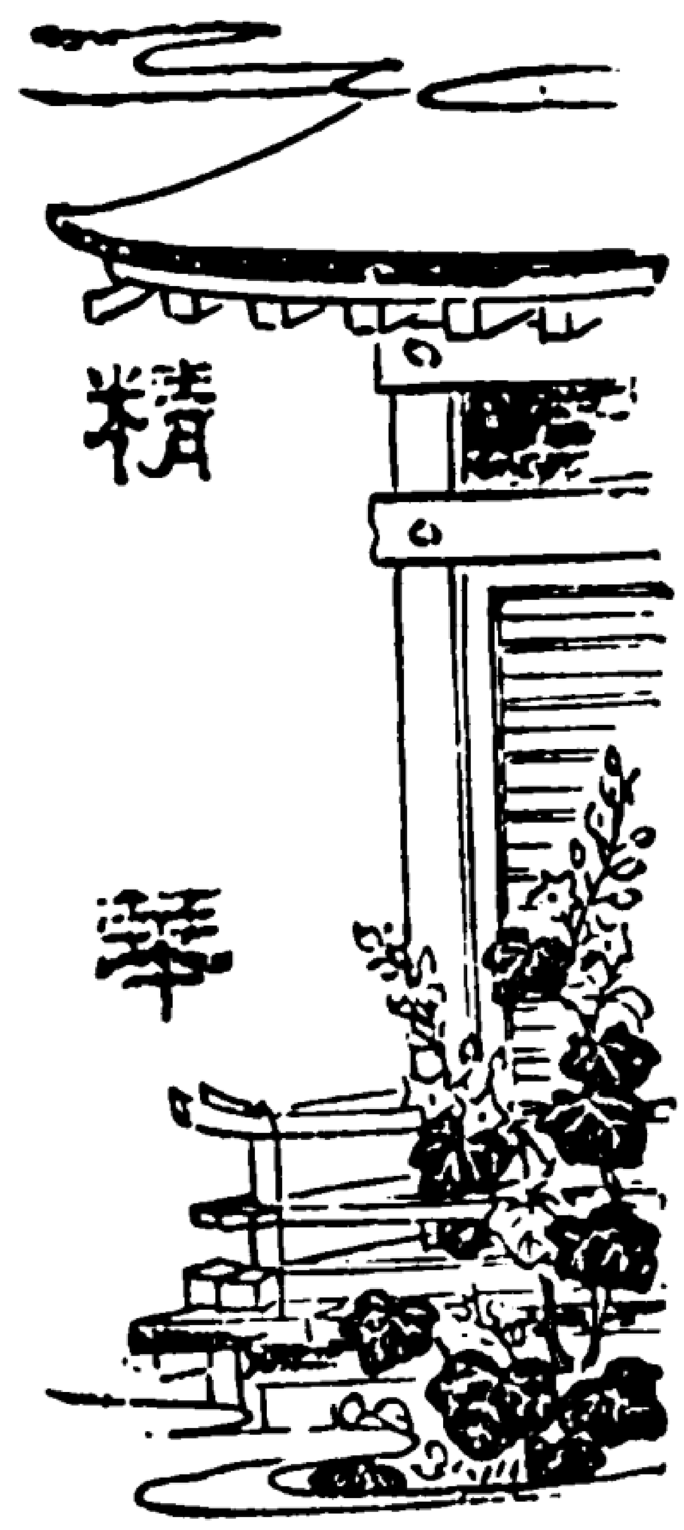
○新聞記者 ○醫師 ○美術家 ○建築師 ○齒科醫 ○技師 ○教師 ○獸醫 ○機關師及火夫 ○大工 ○獵師 ○馬丁 ○小使 ○滊車機關師及火夫 ○煉瓦及石工 ○樵夫 ○車匠 ○屠殺人御者 ○水先案內 ○請負人 ○鍛冶師 ○羅貨人 ○掘石者 ○裁縫師 ○石炭採掘者 ○旅舘番頭

以上は、米國に於ける婦人の從事せる職業なり。而して、今、我が日本に於ける婦人の職業を擧ぐれば、

○女醫 ○看護婦 ○電話交換手 ○電信技手 ○教師 ○保姆 ○畫家 ○音樂師 ○產婆 ○紡績 ○綿布織 ○羅紗織 ○理髮 ○校正係 ○講談師 ○鐵道事務 ○麥稈製造 ○製紐 ○マッチ ○卷煙草 ○製帽 ○製靴 ○昆布製造 ○玩具製造 ○製藥 ○團扇 ○ボタン ○襟飾 ○下駄緒 ○製紙 ○活版 ○製本 ○造花 ○刺繡 ○編物 ○染物 ○砲兵工廠 ○セメント ○火藥製造 ○三井製作所 ○俳優

此れ、彼我婦人職業の大畧なり。吾人は、我が工業界の膨脹と共に、婦女勞働の益々、各方面に侵入しつゝあることは、彼の歐米と大差なきを知る。若し現時何事も、彼に摸倣するの趨勢をして、此の儘に放任せしめんか、聽くだに厭ふべき屠殺人、

火夫馬丁の如き勞働者を、我が優美にして、貞淑なる婦人の内に見るに至らんことを。嗚呼世の貧本家、及び、社會論者は、何を以て、此が救濟の方法を講せんとする歟。（未完）



勅語要義（第二）

東久世通禧謹述

邦國の元始、帝王の始祖、及、國俗習慣の、由りて來る處は、載せて、歷史に在り、普く、坤輿萬邦の歷史に就て、之を徴するに、其の建國基業の宏遠なること、開國始祖の德澤深厚なること、及、國體の一種特殊にして、至尊至瑞なること、我が國の如きは、又、他にあるべからず。

天地剖判の初、獨化にして生れませる造化の三神を、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神と申し奉る。天地を經營し、國土を造成せさせ給ふ。天神七代伊弉那岐伊弉那美の二神に至り、神功、全く成るに及びて、之を、皇祖に傳へさせ給ひ、皇祖、之を、皇孫瓊々杵尊に傳へ、天下の君とせさせ給ひて此の天地清淑、山川秀靈なる國土を治めしめ給へり。時に、皇祖の神勅に、

葦原瑞穗國者。吾子孫可レ王之地也。皇孫就而治焉。寶祚之隆、當下與二天壤一無上レ窮矣。

と宣ひ、又、神鏡を執りて授けて、詔したまはく。

吾兒視二此寶鏡一、當下猶レ視レ吾、與同レ牀共レ殿以爲中齋鏡上と。

兼て劍璽を賜ひて、天位の信とせさせ給ひき。

皇孫、命を受け、降りて、天下に君臨せさせ給ひて、皇威尊嚴、日月と共に昭昭たり。而して、皇祖の皇胤は、世々、相繼ぎて、天下を統治せさせ給ふ大君におはしまし、天神の子孫は、分れて、臣民となり、以て、この國體を造成せり。

皇孫の、始めて、國に就かせ給ひしとき、先、筑紫の一方に都せさせ給ひ、 皇祖の御遺訓に從はせ給ひて、專、仁を施し、德を行ひ、以て、遠來の民庶を懷けさせ給ふこと、數世の久しきに及べり、 神武天皇に至り、王師を率ひて、頑僻不享の徒を征し、中州を平定して、天下の民、廣く皇化に浴する基を開かせ給ひ、以來、列聖、此の聖意を承け、斯の民を愛養せさせ給ふこと、慈母の、赤子に於けるが如く、仁政盛德、史筆を絶たず。斯かる神聖なる皇室の下に生れたる吾人臣民の光榮は、之を、何にか譬ふべき。臣民たるもの、深く此の洪恩を銘肝し、各、其の本分を盡し、皇運を扶植し奉りて、益、此の光輝を發揚することを努めざるべからず。

前述の如く、我が國は、天地開闢の始より、君臣の分定りて、皇祖の胤、萬古易らせ給はず。皇祖の遺體を以て臣民に臨ませ給ひ、臣民は、また、往時歷朝の恩澤に沐したる群臣の裔孫にして、他種族の混ずることなく、同一氣の血脈を受けしものなれば、君臣の情、自然に、父子の親と一致結合し、忠孝禮義の美風をなせり。

旣に、斯の如く、粹美至善なる國風は、萬邦に卓出して宇内に煌燿し、長く、神州の光輝となれるものなれど、異邦には、大に、然らざるものあるを見るなり。現今、君とする所は、何の緣故もなきものなるのみならず、或は、父祖の讎敵たりし者もありて、忠と、孝とは、終始、相背反せり。

かゝる邦國に在りては、忠孝を全うして、世々、美風を成すといふが如きは、決して能はざる所にして、此の美風は、光榮なる我が臣民のみ、特有する所なり。

而して、日本人民は、同族一家にして、異人種の聚合せるものにあらざるが故に、皇室と國家との爲には、萬人、皆、身命を犧牲にして、報効を謀るなり。他國に在りては、然らず。一國域內、諸多の人種を包容し、言語習慣を異にするもありて、常に、同心一致すること、甚難く、同一國家の下に在りても、常に、向ふ所を異にし、終始、紛爭の絕えざるなり。我が國の、億兆、同心一致して、只管、皇運を扶翼し奉るは、實に宇內に卓絕せる美俗と云ふべきなり。我等日本臣民は、此の如く、宇內に卓絕せる諸多美風を保持し、以て、祖先以來、此の君子國の體面を全うせるものなれば、益、之を發揚し、愈、之を顯彰することを勉むべきは、言ふを待たざるなり。

抑、星羅棊布の國、皆、其の體相を異にし、自然の特性を有せざるものなし。而して、我が國の體相は、萬民を以て、一君を奉ずるものにして、一君を以て、皇孫に授け、詔して、此の國の君皇と定めさせ給ひしより、君臣の分、曾、亂れず、且、人民は、皆、天祖の末裔、皇上は、歷代、皇祖の御正統なり。而して、君臣の間、父子の如く、子孫は、此の慈愛なる大父母の鞠育によりて、世世、安樂に生活することを得るものなれば、萬般の事、皆、此の義によりて、經理せられざるはなし。是、即、我が國體の、萬邦に特異なる所以にして、國體の意義、最、明瞭を要する所以なり。而して、萬民をして、悉、之を了得して、その本然を誤らざるに至らしむるは、是、國に、敎育の

制を設けて、萬民の學を立つる所以の本旨なり。されば、學問の至大至要は、實に、この立國の特趣を誤らざるに在るなり。

若松の阿仙

田山とり子

都はなれたる地の人の中には、女の、二度のよすかを求むるをも醜とせざるものあり。甚しきは、遂に、一人にて在り果てむことの愚しさをさへ、全く耻づる心なしに、公言するさへ珍しからず。思へば、彼の悲しむべき離婚の蠻行を敢てするもの丶多きも、是等不心得の影響せしところ多かりけむよ。

こ丶に、いと殊勝なる女こそありけれ。是も若松の城下のものにて、材木町の年貢地にすめる五右衞門といへるもの丶娘にて、名をばお仙といひけり。不幸にして、まだ、廿歳をこさぬうちに夫にさきだ丶れけれど、あたり近所の所謂親切者は、寄り集りて、親のためいとほしければとて勸め、必ず陥るべき未來の悲境のおそろしきぞとてそ丶のかし、或は、一人をのこしゆく不實者のために、身を献げむは、愚しき極なりとて誘ひ、或は、遂には挫くべき志操を、唯しばしの間、試みんために、心を苦むべきことかはとて、しきりに、後夫を求めむことを迫りしかど、仙女は、つや／＼之を聽かず、皆よきほどに答へて、其の信切を謝し、一生を、親のため亡き夫のため消さんの決心を動かすことなかりき。

こ丶も、亦、例には洩れず貧かりけり。父は年老いて耕作のことにもたづさはられず、母は、父に較べては十有餘年弱かれど、これ、はた、羸弱き

性質にて、勞働こゝろに任かせねば、一家三人の糊口の途は、たゞ、このかよはき仙女とりの腕にかゝれり。心用ゐぬくまとては、露なけれども、年弱き女の身のかなしさには、三人らく〳〵と日を送らるべきばかりのはたらきは、容易の業にあらず。折々は、兩親の不足を補はむがために、わが食の全部を添ふることもありき。すはこそ時機の到達しつれと、飽まで親切なる輩は、再び、後夫のことを言出しゝも尠からざりしが、仙女は、猶、きゝいれず。親に憂目を見せ奉るは、心苦しきことにはあれど、さりとて、我に疎略なる心ありて然るにあらず。親のためとて不義を敢へてするは、決して、親のためならざるのみか、親も憂へたまふべく、我に於いても忍びざるところなり。むしろ、人なみ〳〵の行動して、能ふかぎりにて孝行を盡さむとて、これよりは、更に、身を碎きて、親のために勤みけり。

同じ城下、甲賀町に、治郎右衛門といへる者ありき。隱居所にすめる養父玄心といふが、七十にもなりなむ老人なるに、年久しき病あるに、かてゝ加へて、起臥をもたすけらるべき妻には、はやくより別れ、獨、つれ〴〵と暮すに仕ふべき責ありき。妻は、即ち、其の三女にて「長次の二女は、はやく、同じ城下の他に嫁さぬ。これらの人々、かはる〳〵、隱居所にいたりて、慰めいたはることを怠らざれども、皆、各自が職業をもてる身なれば、心ゆくばかりの侍養もなりがたきを常になげきたりしが、仙女のことを傳へ聞きて、然る人ならばと、其の心根をたのみ、彼の父母を飢ゑ寒からしめぬ約束むすび、切に乞ひて、玄心の看護人としたり。この時、仙女廿六歳なりきといふ。これより二十有餘年、食物のこと、藥の煎じおろ

し等はいふも更なり。祖先の墓參、近郊へのそゞろありき、さては、神社佛閣へも手をひき、或時は背におひて參詣せしめ、臥蓐にある時は、枕かみにありて、頭をひねり物語などして意をやすからしめ、衣服のこと、ね酒の分量など、其の心を用ゐること片時も渝ることなかりき。

然る程に、父五右衛門も、八十を超え、母も七十にあまりけるが、ある時二人ながら病に臥しければ、主人玄心も、仙女が心を推察して、斯る折だに覺束なからず介抱せよとて、暇を與へぬ。仙女喜びて、しかしながら、晝間の程は、主人の用を爲し、夜更けてより家にかへり、何くれとねもごろに看護し、曉がたには主家にかへりけり。さても暫の日子を、少しも主人の用をかゝざりき。また、彼の往復には、必ず、鎭守の社に詣で、平愈快復を祈れり。斯の心、いかで神明に通せざらむ。日ならずして兩親の病もおこたりき。

總べて、我が身の、なりかたちをつくろふなどいふ心は、つゆもたず、亡き夫の後世の幸福をいのることゝ、主人と兩親とに仕ふることゝに、專ら、心をかたむけつくして、更に、他志なかりしかば、寛延元年に、領主より、其の忠孝を賞せられ、錢穀をたまはりきとぞ。



女禮

婚禮式（承前）

有住常子

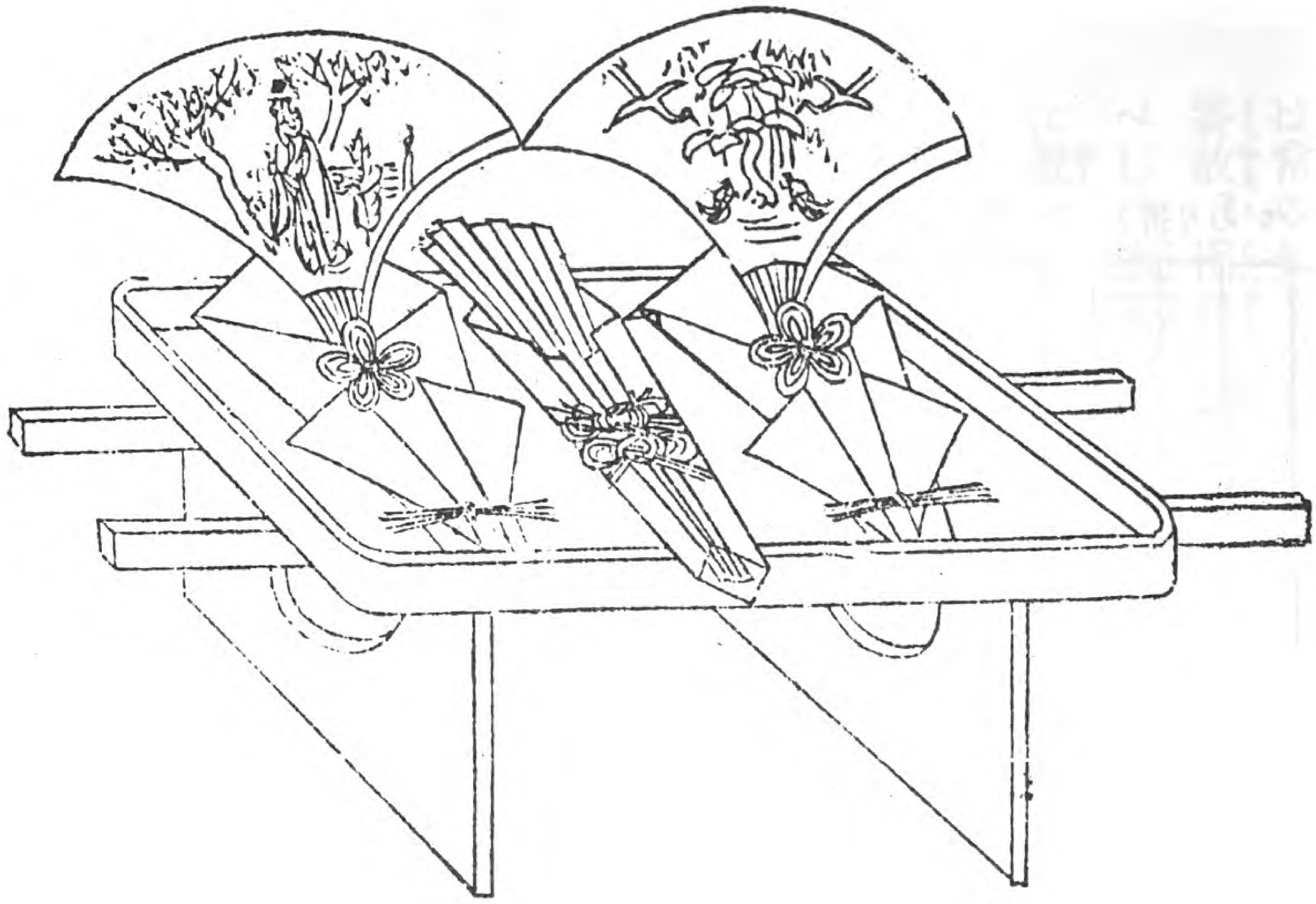
志ん上
小袖　一かさね
をかま　一腰
おび　一すぢ
或ハ茶 まん作　一をり
さけ たひ　一をり
寿するめ　一をり
酒たる　一荷
以上

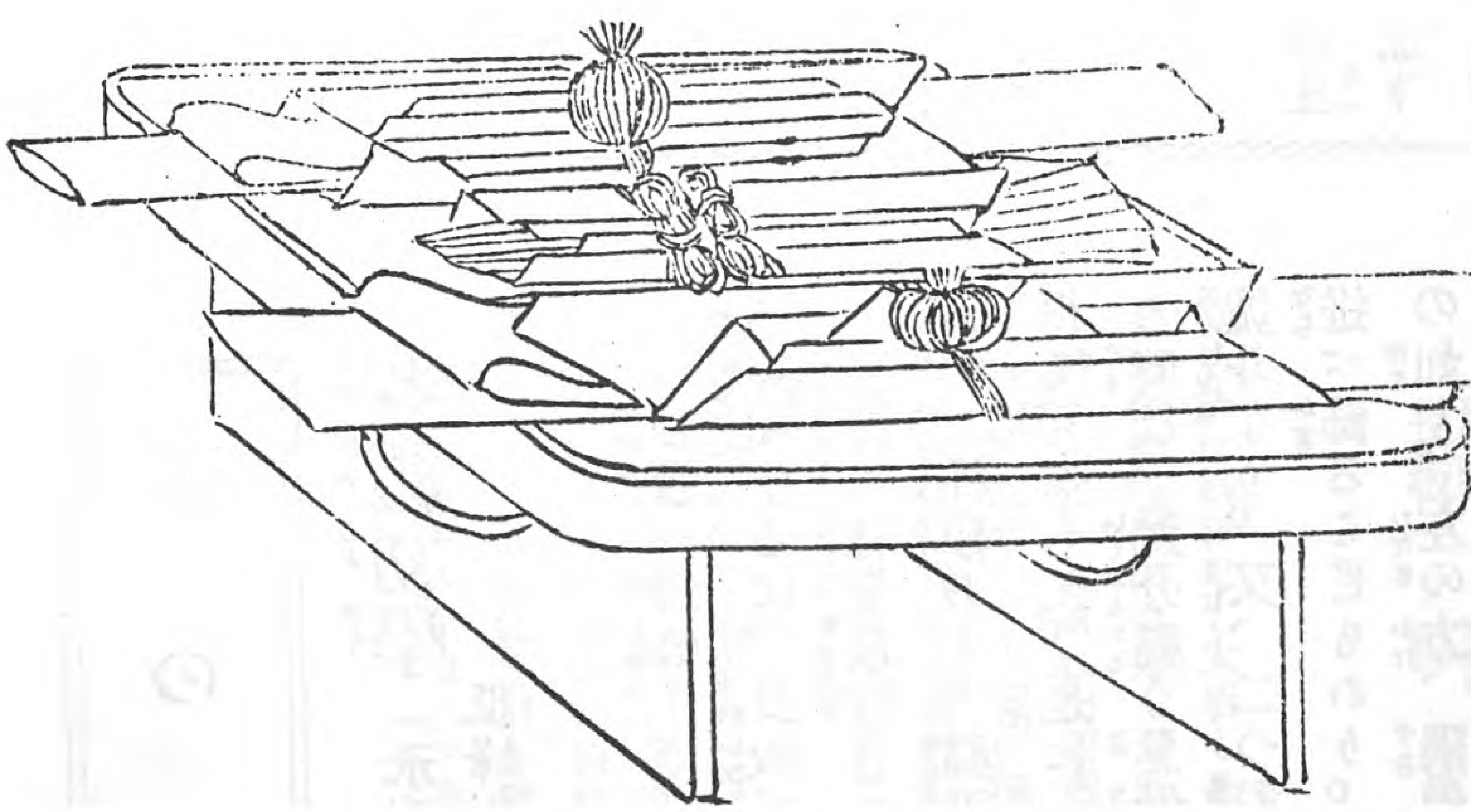
志ん上
小そて　一重
はかま 或帯一すぢ　一腰
或茶 たひ　一をり
寿するめ　一をり
たる　一荷
以上

志ん上
おび　一すぢ
寿するめ　一をり
御たる　一荷
以上

進上
生絹　一疋
御樽　一荷
以上
聟名

志ん上
真わた　一屯
酒たる　一荷
以上
むこの名





舅姑へは、横目録にして、（紙一枚を二つ折りに書くべし）男女交りなれば、假字交りなり。何も、片木、或は、白木、足打臺に据うべし。

至極の畧儀には、祝物代として、堅目録斗贈ることゝもあるべし。其の代料は、金銀包にして、赤白水引を掛くるなり。但し結切。

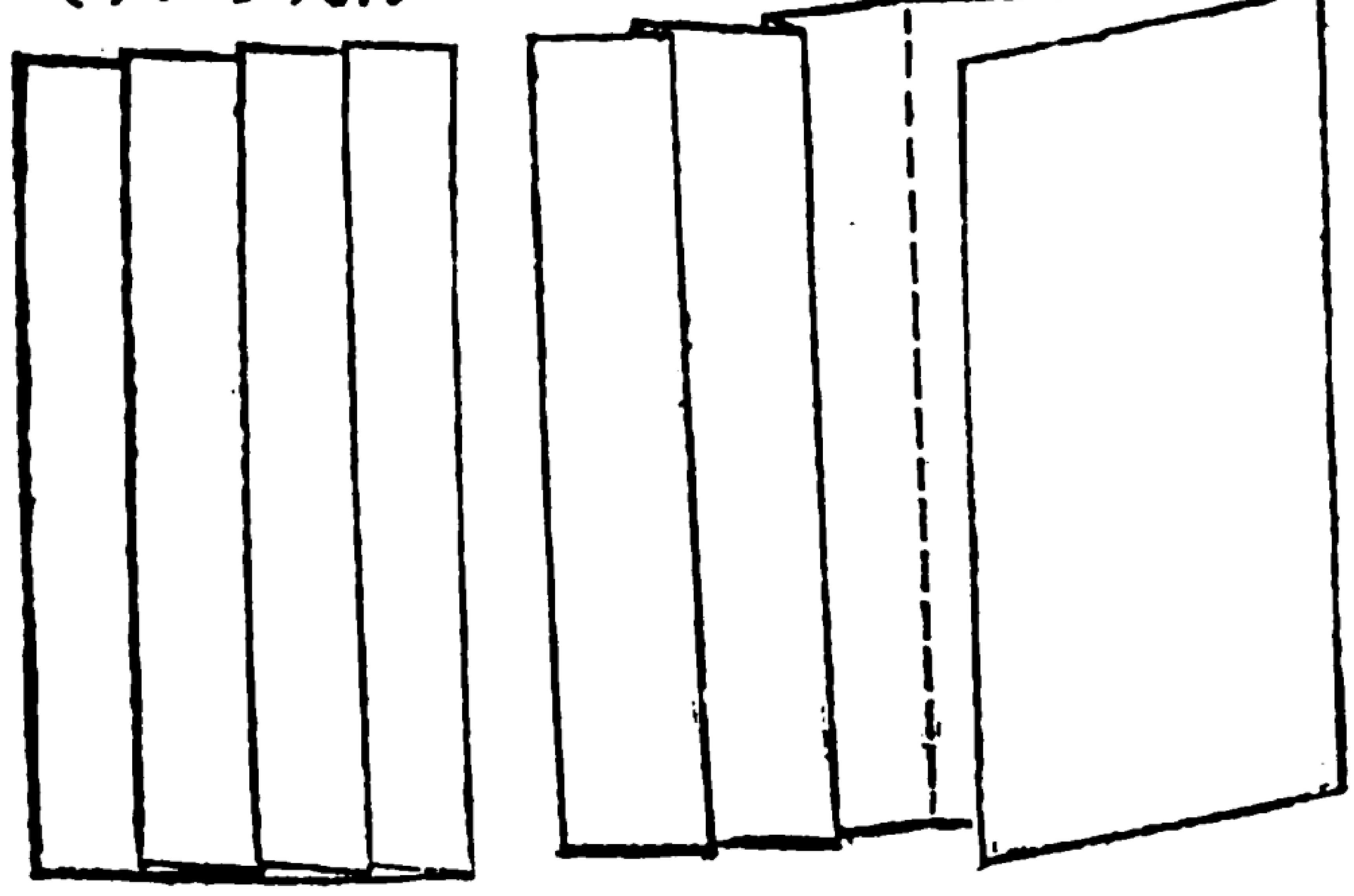
折方

紙入包

有仕くわう子

此の紙入包は、もちひ方は、前の如くにてよし。

(折りあがり)



茶の湯

茶禮初學(承前)

孤峰庵碌仙齋不美

關葦雄

長板一箇飾

不美案ずるに、長板と云ふものは、眞の臺子の天井と柱を取除きたるものなり。眞塗と掻合の二種類あり。鄭重の方に屬するものと心得て可ならん。是に一個置迚、下圖の如くなる時は、幾分輕く見做すべし。一箇置は、風爐斗なり。又、二つ置と唱へ、風爐、水指と、並べ飾ることもあり。此の時は、柄杓は、常の如く、左の方、隅の處へ、蓋置を置合、柄杓を引なり。點前は、水指の置場換る故、大

に一變化して面白し。濃茶もすべし。炭手前は常の如くなれ共、座する膝、大に左の方に寄故、困難の場合なきにしもあらず、注意すべし。濃茶の時には、袋は勝手の方、板の上に置べし。



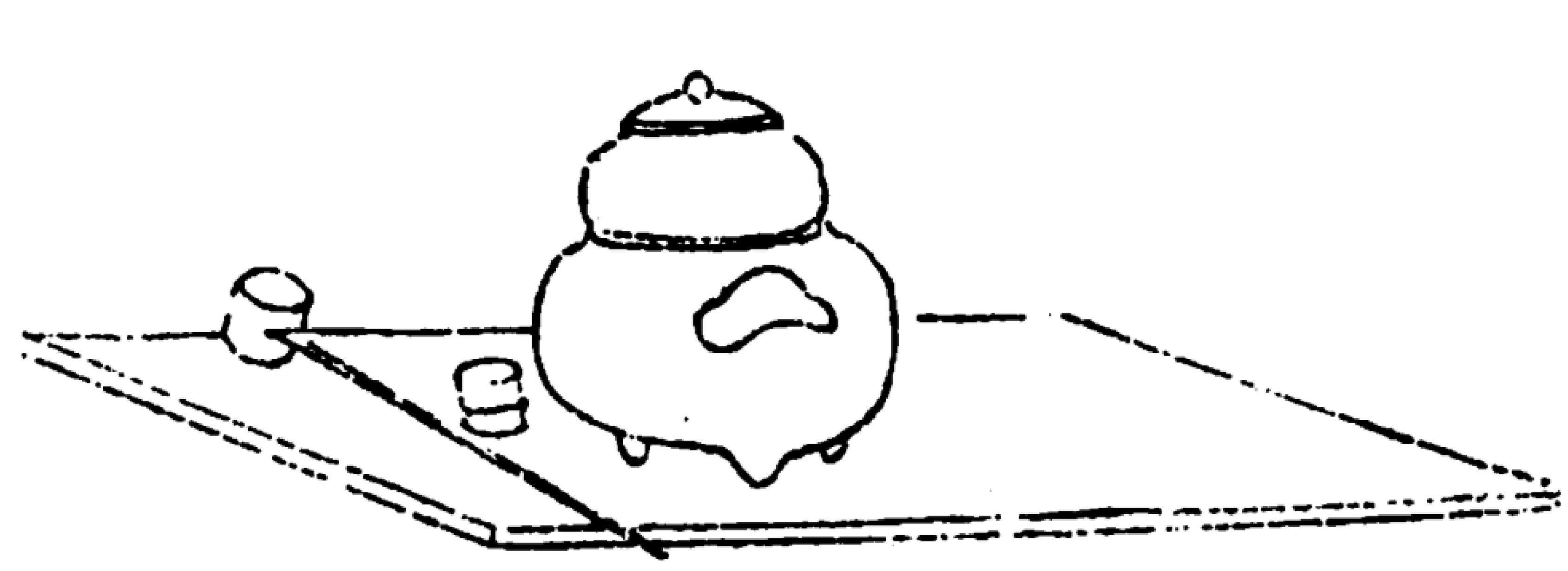
大板

不羨曰、是は長板を二個に切たるものなり。長板と置合は、差違なく、一つ置に限、如二長板一柄杓を殘す事も有レ之、濃茶入の袋は、瓢向に置き、大板は、長板と、小板の間ものなり。爐には不レ用ものなり。

長板一ッ飾　天然好

初め飾は柄杓なし大板も是に同じ柄杓飾時は例の如く湯返しゝて勝手の方へ眞直に引蓋置は飾の通り片假名のトの字に置合柄杓の切留八分程出し置此點前は水指を左りの方角をかけて斜めに置合

兩器は例の如く右の方、運び置合點る時は風爐に向ひ眞直く柄杓は風爐の前へ大板の長なりに横に置合す居前僅少前を廣く座してよし水指の蓋は二ッ取にてよし



宗政

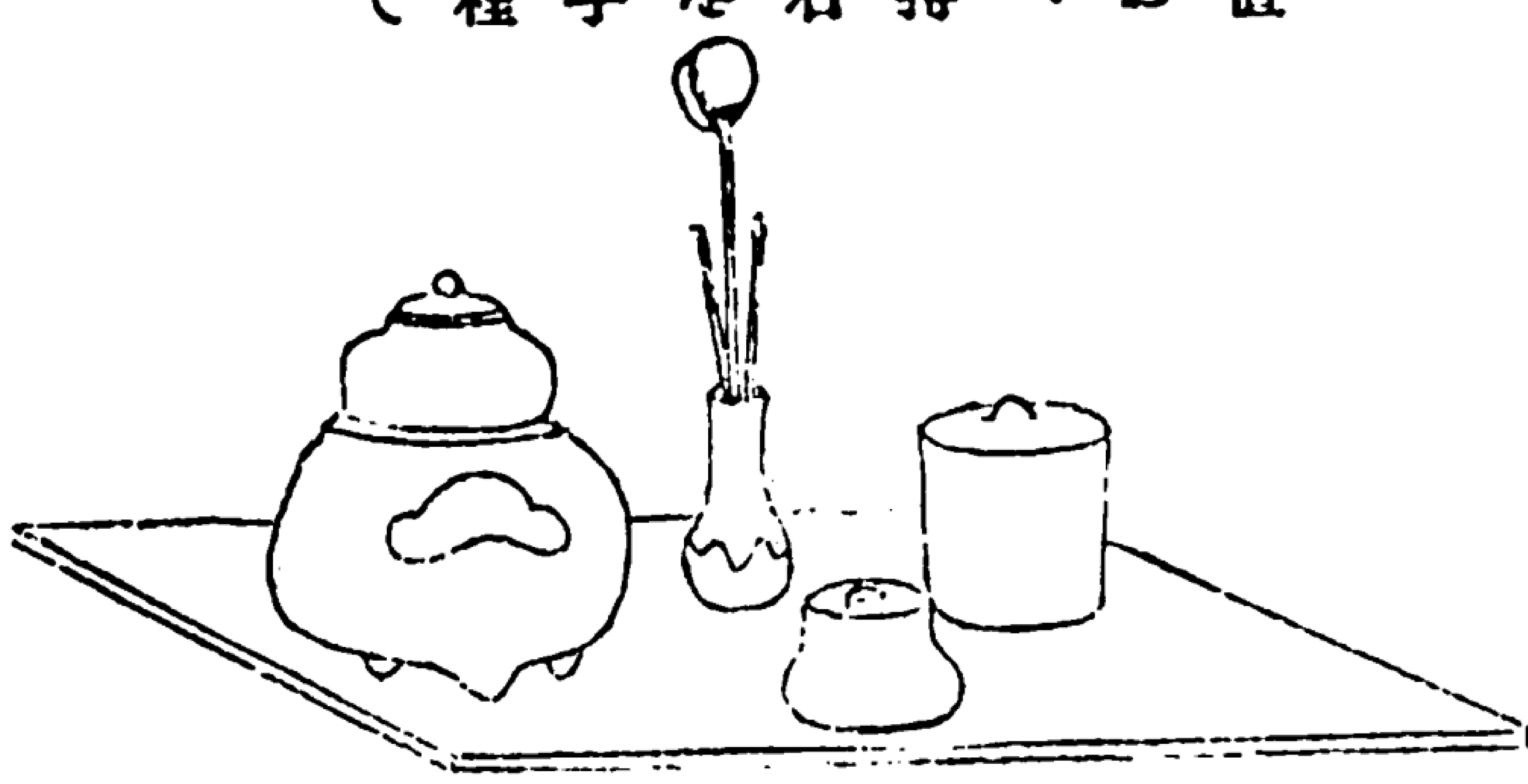
風爐長板總飾（ふろながいたそうかざり）

風炉並釜

水指　柄抄建　中ニ柄杓火筋

飜蓋置

長板總飾の時は茶入茶碗を置合直に點前へ膝を直し右手にて飜をおろし右手にて蓋置を出し本の處へ置付次に火箸を右手にて腹前へ持來り我方へねせて左手にて持又右手にて向の方を持左手を引火箸を淺く持ち直に左手にて長板の勝手の方板の際へ置べし但し、一時程位たち置ものや次に居前を直して點前にかゝる

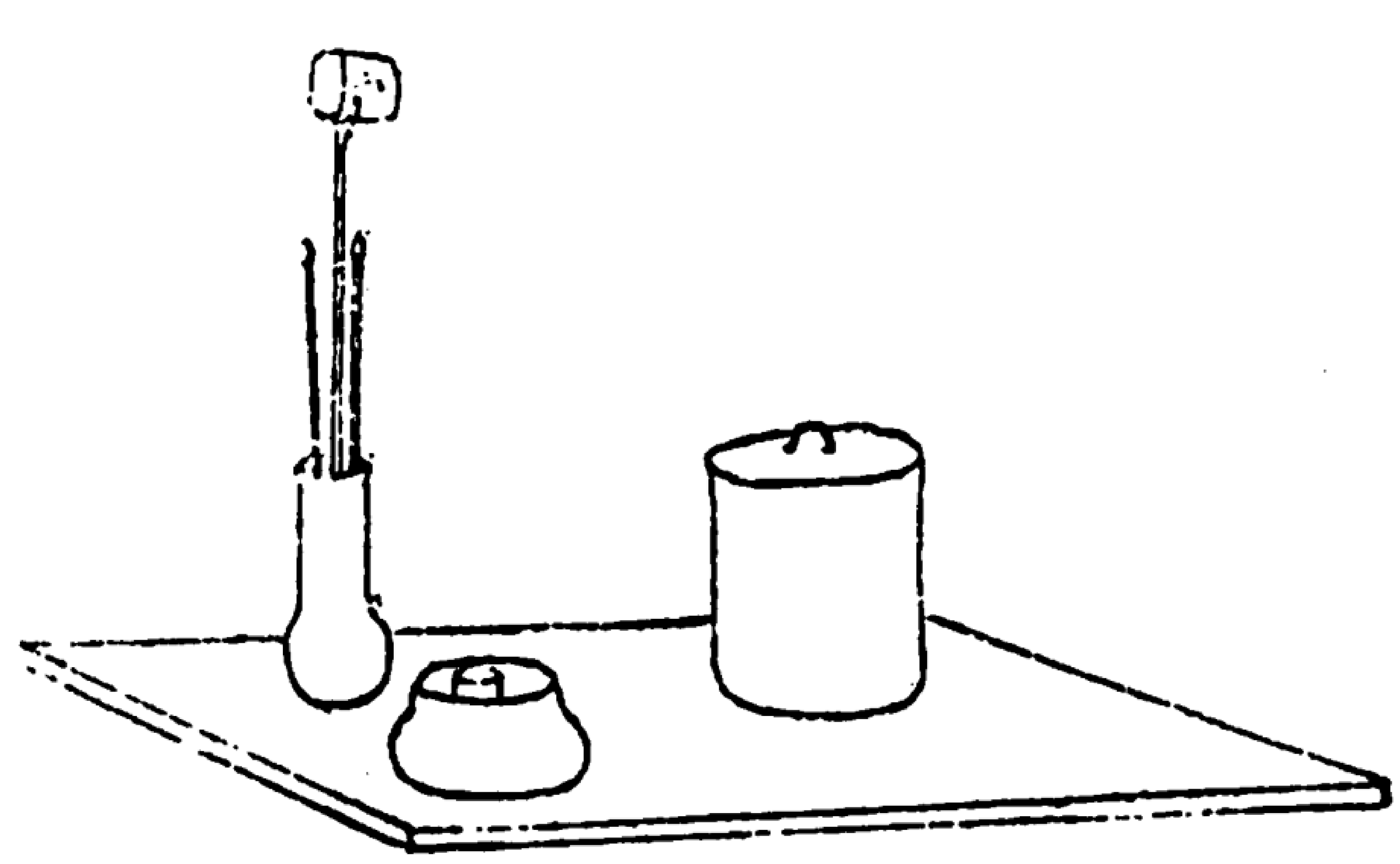


爐長板飾（ろながいたかざり）

惣かざり

建水なければ則其所に蓋置を飾り置べし

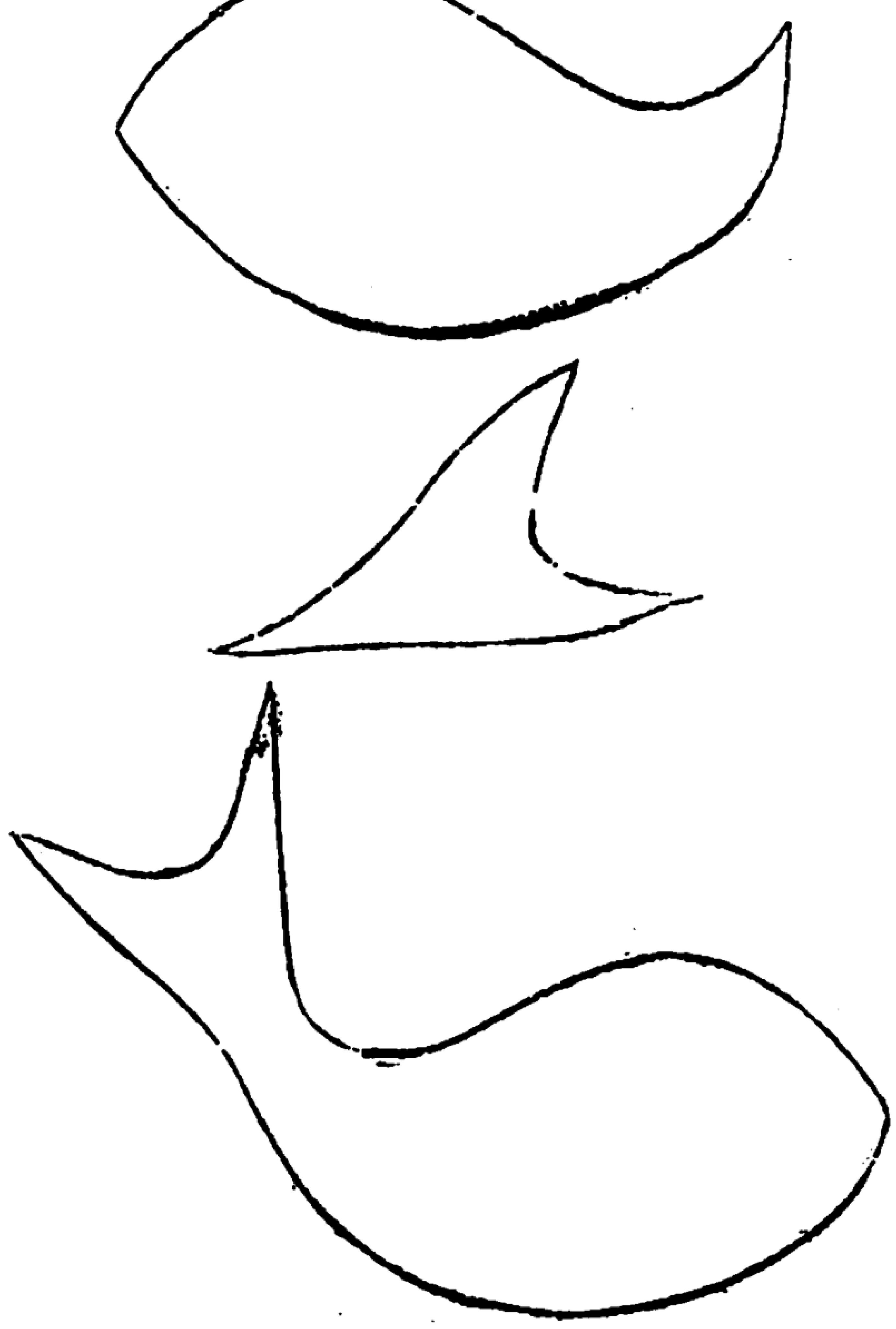
蓋子長板には引切は不用七種の内杯相當すへし

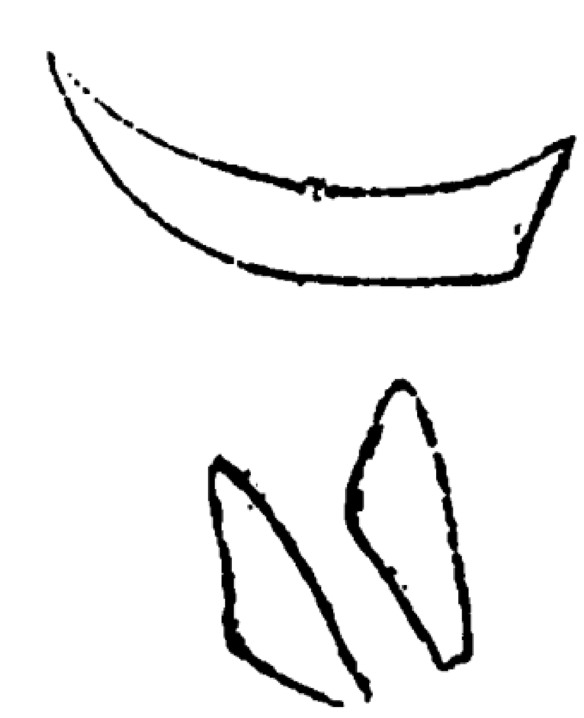


たちぬひ

匂袋　鯛の形

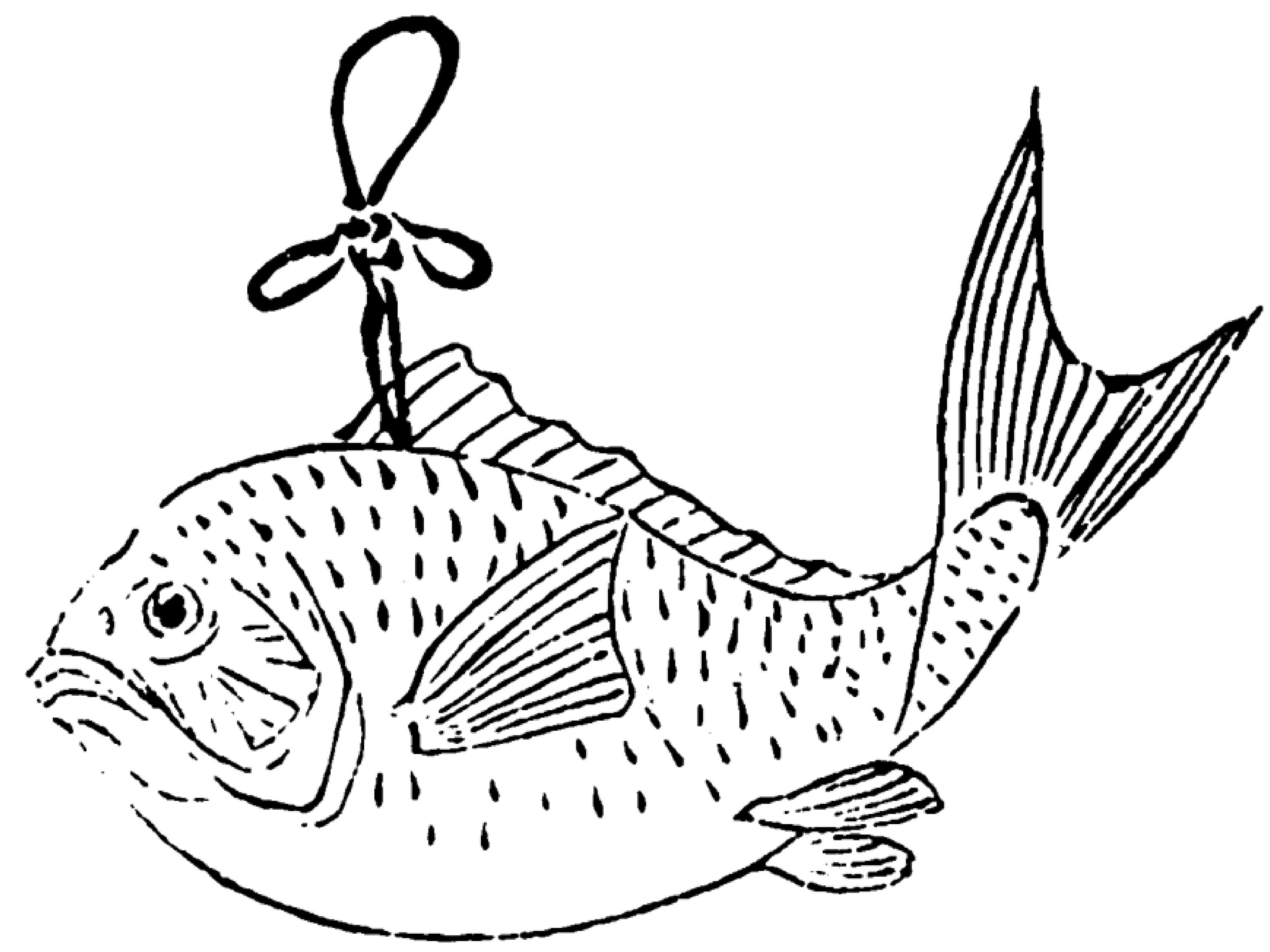
西山たい子





右の圖の如く、胴、尾、ひれ等の形、厚紙を切り、匂と綿とを入れ、切を被すべし。切は、例の通り、白ちりめんなどの、白きものを以てつくり、目、首、尾、ひれ等を書くがよろしく、又、しやうゑんじもて、赤くぼかして、色をつくるがよろし。又、ひれはすが糸にするもよろし。尾、ひれは、紙のまゝにておくもよろし。各の心にまかせ玉へ。それより、どうに、尾と、ひれとをはりつけ、裏にも、綿を入れ、紐を間にはさみて、裏と表とをはり合すべし。左の圖を見て押しはかり玉へ。

（その圖）



だいどころ

常盤味噌

先づ上等の赤味噌を、摺鉢にてよく摺り、裏漉にてこし、柚子の皮、又、椎竹の軸を去りたるものを、水につけおき、それを絞りあげ、細かにきざみ、味噌と交せ合せ、味淋にて、能程にゆるめ、文火にて、こげつかぬやうにかきまはし、煮つむるなり、然して、冷めたるとき、胡麻をいり、皮を去りたるものを、能程にいるゝなり。又、山葵をよく、洗ひ、皮を去り、短冊にきりたるものをいるゝもよし。此の常盤味噌を貯置時は、田樂湯豆腐などの、味噌には、極めてよろし。常に酒を好む人杯は、時によりて、有合の刺身二三片も、椀にいれ、此の味噌を、少しいれ、沸湯を注ぎ、ふたをなし置き用ゐれば、即席の味噌吸物となるなり。殊に、旅行中の用品には妙なり。

生姜の味噌漬

質のよき生姜を撰み、葉さきをきり去り、能く洗ひ、生姜壹貫目に、鹽四合の割合にて、漬込み、おしをおき、水充分にあがりたるとき、とりいだ

して一日日光に、干し、味噌に味淋粕、一割を交せ、輕きおしを置き、三四ヶ月程經て食すべし。

瓜茄子の味噌漬

瓜は、兩端をきり、大なるものは竪に、二つに割り、種を去り、小なるものは、丸のまゝ種をくりぬき、茄子は、へたを去り、丸のまゝいづれも、能く洗ひ、薄鹽にて、三四日間漬け置き、日光に干し、生干のところを、味噌につくべし。

人參味噌漬

人參の兩端をきり、四五日間、陰干にし、薄鹽にて、二三日程漬け置き、夫れを、一日日光に干し、味噌に漬込なり。

割烹と禮節（承前）

石井泰二郎

普通饗應献立の一例

一汁三菜

本膳

膾 すゞき作り　細打太こん　きくらげ

汁 霰かまぼこ　小口松たけ　二葉菜

煮物 鮭角切　くずあん　わさび

飯

香の物 鹽漬茄子

燒物 はちめ　鹽やき

吸物　小鳥　こばう　京のひも

取肴　わさび煮付　千鳥味噌　みかん

酒

菓子　きみ饅頭　小倉羊羹

右は、大日本女學會講義錄に掲げたる女史が講述の樣なり。和氣子刀自の所説は、このごとくして、すべての敎授風、又、かくの如くなりしなり。刀自には、一度面接せしが、未だ割烹の談を聞かざりし程に失られぬ。禮節の敎授法に付ては、聞く所有りしなり。

つけていふ。小川直子のきみがものせられし、刀自が傳を見るに、

田邊和氣子刀自は、生國加賀國、金澤の舊士族にて、父を田邊信道と稱し、後案山子と改めたり。元祖は、大職冠鎌足公の末流にて、伯州妙見山の城主從五位下田邊美作守といへり。其の末孫加賀國守前田利長きみに仕へ、功ありて、五百石を賜はりしより、世々前田家に仕へたりしが、云々、文久三年前田愛寧のきみの御女禮姫君の御側附に撰ばれ、中老職にまでなりのぼれり。其の當時姫君の學ばせ給ふ事は、難波津淺香山の手習ふ道はいふもさらなり。歌に茶道に、又は花鳥のうつし繪、此の他にも、くさぐさの業ども御かたはらに見奉りながら學び得て、たど〱しからぬ迄に至れりき。云々

これより後、石川縣女學校に、京都高等女學校舍監をつとめられし事をあげられたり。東京に來られてより、又華族女學校等に、其の敎へを垂れし事も人の知る所の如く、すべて、割烹の緒言にいはれたる如き方針を取られたりと思はるゝなり。

華族女學校教師兼
女子工藝學校教師　岩間芳松先生

煮燒と一口に申しますが、物を煮るにも、燒くにも、其の品によりて、段々方法がかはります。其で、今爰に掲げますのは、先づ肉類の仕立方です。何となれば、野菜は、どうなりかうなり、從來、いづれの國でも料理して居りましたですが、獸肉類は、近頃の事ですから、まだ調理が、十分熟して居りませぬ。それで、其の方法を示して、置いたならば、此の法で下婢にでも、お申つけになるに便宜だらうと存じて、これから申します。云々

これは、帝國婦人協會の發行日本婦人の料理講述の緒言にして、岩間先生の說く所は、すべて、是を以て、其の方針と爲すが如し。

つけていふ。先生は、割烹店にて有名なる某亭の主人なり。其の割烹店主として、客に進むる所の物も、又、右の方針に外ならざるが如し。

學藝

國文學講義　井上頼文

紫式部日記(二)

一

この講義は、文章の組織を明らかにせむため、一句ごとに、行を改めたり。

應答の談話は、　一字さげにし
談話中の談話は　二字さげにし
歌　書簡文章は　三字さげにし
て、一々區別せり。

二

含みことば　言外に匂はせたる意義、その他、必用と、みとめたる條は、一々、その印

して、語を補ひ、文意をあきらかにせり。

三　また、そのまゝ直譯しては、かへりて曉りがたからむと覺ゆる所は、適宜に意譯して、文義をつまびらかにせり。

四　二種の意義をかねたる語は、一々、その下に轉用せる理由を註して説明を加へたり。

五　譯解の文は、おほかた音便を用ゐたり。正しき假字を用ゐるときは、發音のことなる故、かへりて讀みにくからむ事を思ひてなり。

譯述の例につきては、猶、いふべき事もあはせたあれど、一々列擧せば、煩雜にわたらむ事をおそれ、今は、その大要のみにとゞめたり。

本書に用ゐたる符標の主なるものは

讀

。　句

（　）　註

『　』　應答の談話　および　書簡文

「　」　談話中の談話

‖　目じるし

｜　含みことば　補ひたる詞

漫録



女訓綾廼雛形（卷の壹序前）

楫取素彦

一いたく物めでし、執着ふかさはあしき心の癖なり。めづらしく、新しきに移ろひ、萬づ、あはつけきは、婦女の通病なり。かたくつゝしむべし。

一私のみよしとおもひて、人言を容れ得ぬは、誠

に拙き心ぞかし。かしこき人の諫を聞てこそ、過ちも知り、才覺をも益すならめ。たとへ、我と同じなどの人にもせよ。弘く問はゞ、益おほかるべし。三人行へば、必ず我師ありといふ。本文あり。我と彼と、差向て、何れが善きか、しかと定めがたき事あるべし。これに、最、一人加へて、此の事如何にと問はんに三人のうち、二人の思ふ所同じくば、夫を執りて、遵ひ用ふべしとなり。

一我が身を摘みて、人の痛さを知れといふ事は、聖教の、恕のこゝろにも適ふべき諺なり。此の心を推擴めなば、人の怨みを負ふことあるまじ。

一物のあはれを知らざれば、人木石にことならずといふことあり。このあはれを知るは、取も直さず、惻隱の心にして、仁道の端なり。女は、とりわけて、ものゝ哀れを知りてこそ、慈愛をむねとする婦德にもかなひつべけれ。

一草紙物語やうのものも、學びのいとまに、能く見るべし。人情に近くして、もののあはれも、よく知らるるなり。光源氏は、徃時にも、將來にも、またあるまじき名文にて、殊に勝れたるものながら、作意ひたすら風流をのみ主とせしものなれば、幼學には斟酌あるべし。

一女のとの文といふは、五條の三位の嫡孫爲家の大納言の室家なりし阿佛の尼公の作にて、紀の内侍に贈られたるものなるが、心言葉、ともにめでたき文なり。また、室町時代のものに、乳母の草紙と題せしあり。これも、善きものなり。よくよみ味ふべし。都て中むかしのものには、佛道を、上もなく貴みてしるせり。佛くさしとて嫌ふ人も有るべけれど、それは、それとして善き處を採りて可なり。微瑕を以て美玉を捨つべからず。

一人に交るに、誠を盡すべきは申までもなし。も

し、我の實意を左までに思はぬか、また、彼より運ぶ志の、我がつくす處の半ばにも及ばぬ事のあるものなり。去りとて、其の人をとかめ恨むは拙なし。唯、我が身を省みて、誠意の足らぬを思惟すべし。

一誠の道に入らんと思はゞ、まづ、妄語せざるよりして、入れと、司馬温公は敎へられしとぞ。空言いはず、詐り事せぬは、犬うつ童にも守らるべし。左はあらで、ふと言ひ出る言葉のうへにも、それ程の事はよくしつべし。何條事かあらんなど、輙く放言せしを、まことに、其の言を踐み行んとするに、その言の半をも行ひがたき事あるものなり。これ、即ち、不誠なり不信なり。かうやうの事一つもなく、全く、口と心と言と行と一致にして、始めて、誠の道に立入らるべき事ぞかし。

一幼稚のほどは、我も心つかず、人も大方見ゆるすものなれど、漸く、おとなびゆくまゝに、彼是の心づかひ、憂きもつらさも、とり〴〵にて、堪がたきまでに覺ゆることもあるべきなれど、これも浮世のならひ、我が身一つの事にもあらねば、かならず、思ひ屈すかべらず。只管、おのれを省みて、過あらば改め、身をつゝしむより外あるまじ。車を碎く山路のさがしきも、舟くつがへす浪のおどろ〳〵しさも、人の心に比ぶべくもあらずといへり。よく心すべき事にこそ。

一いかばかり親しくかたらふ友ありとも、あまりに打とけ、狎々敷かたに過るは、遂に親みを失ふ本となるべし。親き中に禮義ありといふは、味ふべき諺ぞかし。彼の黄昏の少將と聞えし、定信朝臣も、婚禮の夜さり、初見參の心をいつまでも忘れずば、互ひに、あきもあかれもせじと申されし

は、夫婦の中らひばかりかは。なべての変りにもよき教なりけり。

一李下に冠を整へず。瓜田に沓を納れずと云ふ事あり。立居ふるまひ、假初の詞の端にも、嫌疑をさくる事を忘るべからず。女の身には、とりわけ愼むべし。

一ある人の歌に韓信が市中に辱めをうけしを

　末つひに海となるへき山水は
　　かねて木の葉のしたくゝりけむ

人は、堪忍の意なくては、何事を營みても、志を遂げ功を立る事はなし得がたし。實に、海なすばかりの器量あればこそ、かゝる耻をも堪へ忍び、終には、海よりも猶、大なるいさをしや立けん。うきにもつらきにも、堪へてこそ、眞の人とは成りおふすべけれ。

一もし、父母に叱りこらされ、あるは、杖をあてらるゝとも、露ばかりもうらむまじ。過をたゞし、怠をせめて、善き人になさんとの慈訓ぞかし。かくうたるゝ身のいたさはものかは。うつ父母の心苦しさは、如何に目もくれ、手もしびるゝばかりにやあらん。去り氣なくもてなし、うち笑ひてあるとも、他人の心は、慈親恩愛のいましめとは、うらうへならんかし。

一師を敬ひかしづく事、父母になぞらふべし。但し親には、愛を旨とし、和らぎて事ふべし。師には、敬を主とし、よろづ、をり目正しくして、狎々敷ことあるべからず。

將來の日本國民（七）

肝付兼行

從うて、生活の方法も、時相應に變へて行かれなければなりませぬが、然し農業だからというて、何も、之を殊更に止める必要はない。其の要は、唯、之を他給的生産に利用するに在るのである。仍て、將來の心がけとして、子弟教導の方針は、惣領は、概して資性の温順なもので、又、家を襲ぐ權利を有つて居るものであるから、父祖の業を裸脚興家的の人物は、兎角次男以下に出るが常であるから、是は、工商業者の方に導いて宇宙を呑むの氣概を引き出し、大事業を企てさすやうにするがよい。されど、之をさせるには、身體を强健にして、智識を貯へ、膽力を練つて、博く各國の方言に通ぜしめなければならぬが、要するに、國富を海外に爭ふには、是非機才、即ち智力と、沈勇、即ち膽力と健康、即ち體力との三つを備へさせなければいかぬ。さうして、是は、偏に、父兄の薫陶と、國民的教育の感化に待たねばならぬのであるから、先第一の手段は、父兄が率先して、教員を尊び、教員の威嚴を子弟に一層强く感じさせることにあると、私は思ふ。あとの注文は、其の上のことだ、依りて、此の事につき、一言を述て、結論としませう。私の調に依ると、御縣下だけで、寺院が、二千三百二十ヶ寺、小學校が、五百五十六校ありますから、一方里内に、寺が、即ち八箇寺七分で、小學校は、僅かに、二校一分であります。寺と學校とは、大約、九と二との比例になつて居ります。又神社は、一方里に、七社で、惣數は、千九百三十あります。さうして、此の外に、まだ、無資格社が、澤山あります。さうして、

又寺院住職の數が千四百四十九人で、小學校の敎員は、千二百三十二人、若し一箇寺に、僧侶を、平均二人とすれば、四千六百四十人となり、敎員數の四倍に垂むとします。此の小學校より、ズット多い寺院や、神社は、誰が建て、此の僧侶は、誰が養うて居りますか、隨分少なからん費用であります。寺院は、勿論アノ世の未來の安樂往生を願ふ所のもの、之に淨財を喜捨するのは、何も悪いことではない。然し私は、アノ、世の未來よりも、モツ〳〵、此の世の未來を賴む人の方を敬ふのが當然で、且つ肝要だと思ふのであります。然るに現今の有樣を以て、寺院と學校とを較べますると、寺院の方が、餘程立派で、其の數も、勿論多い。且、僧侶は、皆、其の内に住つて居るが、學校の方は、少數、且麁末であるのみならず、學校にして、其の構内に敎員を住はして居るものというては、一ツも見ない。されば、優待の望もみ一にして足らぬが、まづ、學校内に住所を宛がふが如きは、最も至當のことでありませう。又、斯ういふ鹽梅に優待することになれば、之を聞いて、自然と千里も遠しとせずして、良敎員が來るやうになる。どうぞ、隗より始めて樂毅を得たといふことがありますから、此のことは、必ず、當縣より始められむことを、切に希望致します。又、斯うなると第一に、敎員か裕かならざる生活の裏面の有樣を、子弟に見せぬ利益かあつて、敎員、自身も、亦、同僚と眼先鼻先に暮すから、互に品行を愼むで、其の智を研くやうになる。されば、是亦、町村内の父兄の思想を開拓するの便宜にもなるのであるから、敎育の振興も、斯して待つべく、至極好都合と思はれます。さて、誠に遺憾なから、最早三時も、少し過ぎましたから、今日は、是で

御免を蒙ります。(完)

正誤

號	丁	段	行	誤	正
二〇八	三十四	下	十二	新築△	新案▲
二〇九	三十二	上	十一 十二	鎖△沈	銷▲沈
仝	三十四	上	十四	如何は△	如何に▲
仝	三十五	上	三	なもの	なる▲もの
二一〇	二十七	上	二	午前	午前は▲
仝	仝	上	十二	では	では東洋の地中海にえろことはできないのである。即ち
仝	二十八	上	八	此れ△	此の▲
二一一	三十	上	四	二百三十人	千▲二百三十人
二一二	三十六	下	十一	罪△檣	罪▲檣
仝	三十八	上	十	憚ろ心△	憚ろ所▲
仝	三十九	上	十三	の、△	のは▲
仝	仝	上	十四	たの△は△結果	た結果
仝	四十	下	四	時に▲	時は▲

おもひのまゝの記

安藤晴晨

(一)歐洲の女王

歐米諸國では、婦人の勢力が、素より熾であつて、近頃になつては、男子と共に、社會的事業に携はらうとする迄、其の意氣が凄じいのである。それで、婦人の社會に於ける地位が、斯くの如くであると共に、婦人たる者もまた、愚圖々々して居ず、各自、その得意の技藝なり、學問なりを持つて居て、立派に自活し得る丈の資格を備へて居る。それで、婦人が、生活の如何なる方面でゝも、男子に劣らず、生活してゆく事が出來るといふ事は、明に、事實の上に證明せられて居る。然し、亦、それを職業とはしないが。すればする事のできるといふ婦人も、今日存在して居て、人生の種々の

方面で、之を見出すことが出來る。歐羅巴の國々の王冠を戴ける人々の中でさへも、若、一旦、必要の場合が起つたならば、いつでも、生活の道を得るに困難を感じないといふ方々がある。今、その、二つ三つを記さうと思ふが、たゞ、之を讀まるゝ人々は、先、よく、我が國と、外國との國體の甚異なることを念頭においてもらいたい。それでないと怪訝の念を懷くことがあらうと思ふ。

敎員免許狀を有せる女王

ルーマニアのエリサベス女王は、公開講演者たる官許を得られた方であるが、王族の中で、かゝる官許を得られた方は、外にはあるまいと思ふ。何故、女王が、公開講演者となられたかといふに、陛下は、始數年の間は、宮中で、若き女子に關する興味ある問題に就て、自巳の意見を述べられ、貴族の令孃だちが、多く出席して、拜聽して居たのであつたが、此の頃になつては、此の講演が一般の好む所となつて、强て、請ひ奉る者が多くなつたので、陛下は、遂に現今は、公立女子高等學校で、講義せらるゝ事となつた。そして、それに必要なる敎員免許狀を得られたが、その免許狀には、國王と、文部大臣との連署があるのである。

醫學士にして手藝家たる皇后

葡萄牙のアマリー皇后も、また、高貴の人々の中で、聰明といはるゝ、御一人であらせらるゝ。國王陛下が、御病身でおはすから、親ら、之を療治せられむ爲に、皇后陛下は、リスボン大學の醫科に入學せられ、普通の學生と同樣の困難を經て四年の課程を終へて、及第せられて、學位を得られた。身王者であつて、醫學士たるものは、現今、此の皇后陛下、御一人であらう。陛下は、常に、

微行して、リスボンの貧民を訪ひて、施療をしてやらるゝが、人は知らずに、たゞ、一人の、善き女醫としか思はないさうだ。

又、此の陛下は、そのやうな善き脳髓を持つて居らるゝと、もに、其の手藝もまた、甚巧であらせらるゝ。近頃伯林で開かれた、人形展覧會で、特色をあらはした者は、此の葡萄牙の皇后の出品せられた、數個の人形であつた、其の衣裳も、裝飾品も、一切、御手づから作られたのである。其の御手細工の中でも、白眉といふべきは、冠戴式の時用ゐられた、八頭立の馬車の小形の摸造品であつたが。其の銀の馬具の如きに到つては、妙工、實に人をして、驚嘆せしむるものであつたといふ事である。此の一揃の價は、一萬五千弗で、今年の巴里の萬國大博覧會におくられた筈である。

多藝なる太后

獨逸のフレデリック太后は、すぐれたる音樂家であつて、且、彫刻繪畫の二に於ても、最も多くの婦人に立勝つた技能を持つてゐらるゝ。此の外に、また、太后は、花卉野菜の類に關して、種々の事をよく知つて居らるゝから、これで、以て、年々少からぬ金を儲けらるゝ事が出來る。太后は、特に裝飾用の珍しき薔薇が御すきでフリードリッヒショッフといふ處に、大な養花園を持て御いでなさるが、その園室には、所々の花卉展覧會で得られた、多くの褒狀や、賞品などがある、或年、ある近衛の聯隊で、皇帝陛下を饗應し奉つた事があつたが、その時に供した果物は、此の太后の庭丁長から買つたので、あるといふ事が後でわかつて、大に、人に感興を與へた事などもあつた。

また、擧げれば、いろ／＼の事にすぐれた、外の方々も多いが、先、右等が重なる方であるから、今回はこれ丈で止めておかう。

斧のえ

松竹莊主人寄贈
荒木田麗女遺稿

おほやけには、稻荷に行幸せさせ給はんとて、春のころよりいそがせ給ひしかど、さまぐ\にさはりありて、のびぬるを、若き君達、口をしうおぼいためり。上も、かほいなく思しめされけるが、わか葉の色も御らんずべく、郭公もゆかしうおぼされて、にはかにこの頃とさだめさせ給ひ、つかさぐ\におほせごとくだり、君達も、樂人舞人のことどれきて給へば、いづこもいそがはしく、三位中將も、此のいそぎのほどは、いとまなく心のまゝにわたくしのありきもえし給はず、おのづから、内の大殿がちにおはすれど、心にはなれぬ事は、わするゝまなく、辨がもとには、文もたえず、をり\/\は、みづからもれとづれ給ふ。筑波山もつかひは絶えずかよへど、言のいらへの、いつも、うゐ\/\しう、うちとけてもあらぬが、めざましう心にくき方もありて、此のころは、せちなる心つきつゝ、なほ見ては、えあるまじう、世のそしりもさのみにたどられず、いかにせましとて、すけがまゐりたらん折、めしよせて、人つてならず、けしきをも見まほしうはし給へど、人がらの、ふつゝかにふとりすぎ、おなじ、すりやうといへど、心は、みなつかしきさまなるもあるを、これは、いふかぎりなうゐなかびて、かほにくげに、いたうくろみて、たけきけはひは、おくの海のあらき夷にやとればゆるむがりなれど、何となうおそろしき心地して、此の人にさしむかひ、うちとけかほに、なれ\/\しう語らはんは、いとむくつけう、おそのたはれをなどもいふべく、心ゆるび

すべくもあらぬがわづらはしう、人のみるめもはぢかはしくて、中々思ひよられ給はす、かうやうの人のあたりに生れいでつる女、よろしとても、何ばかりならん。すこしも似たらん時、いとおそろしうこそあらめ。さらずとも、ほどにつけたる、らう／＼しさならんと、さすがにあなづらはしきかたもあれど、母北の方は、みやづかへ人の中にて、かたち心ばへよしありといはれし人なるよし、聞おい給へば、女子とて、そのをしへにまかせけるならん。左の大殿のうへも、たえず音信給ふと聞は、そのおもてふせなることとはせじと、たかき心もつかふものから、世の人もかずまへて、いひあつかふならん。さてなん、かる／＼しき、よのつねのあたけは、すさましけにしつゝ、おほろけのことには、なびかじとよういふかきなめりと思しめくらすには、一かたに思ひくだして、なほざりのすさみめかしう、此のまゝにてやまんは、口をしく、たゞひとめ見るやうもかなと心にかけわたり給ふ。かしこの心しりにてかよはし給ふは、道定とて、撿非違使のつかさかけたる殿人なりける。その人をめしよせて、さりぬべくは、垣間見すべくたばかれとの給へば、かしこまりてうかゞひありけど、せばき家に、人おほくつどへて、常にらうかはしう、しめやかなること、つゆなく、ことに、かしつく女なれば、たまさかにも、はしちかうはいださず、北の方、よろづに心づかひしつれど、いさゝかひまなきを、道定もすべなく、心もとなう思ひたり。行幸は、五月なりける。ほどちかうなれば、いづ方にも、わかき人々物見んとて、たかきいやしき家ごとにようゐしさわぐめり。常陸が方にも、女に物見せてんと、いそぎたつにぞ、こたちも、とり／＼なる、おのかしゝ

のいとなみにくしけつり、物縫などに、心いれて、皆つぼねにおりつゝ、例ならず、人すくななり。母君さへ、まゝ子の紀伊の守が妻子うむとて、ひと日、ふつかそなたに行たり。日ごろうかゞふ人はいとよきひまとて、君にかくと聞えさす。なまはしたなしとはおぼせど、さのみふかうしもたとられたまはず、月もなきをりなれば、くらきも心やすく、いたうやつれ給ひ、かの人のしるべするまゝに、忍びておはしたり。今夜は、あるしのすけも、左の大殿のめしとて、こゝにはなきよしなれど、おそろしさもなく、門入りたまふほども、とがむる人もなしみちさだあないしりて、そなたにいざなひまゐらす、女すませつるは、臺めく所なり。はやう、かうしはおろしつれど、一間ばかりはあけながらあり、人のけはひもせず、みなねたるにやと思しく、いたうしづまりたり。君は、

心やすくたちまぎれていり給ふに、内はいとゞ小くらく、おくの方にはつかに人音するやうにて、屏風几帳たてかさねたるひまより、ほかげの、かすかにかよふを、しるべにつたひより、ものゝはさまに入りて見たまへど、火いとあきらかにかゝげて、繪どもひきちらし、手習したるにや。硯のはこもあけながら、筆もうち捨て、箏をまさぐり居たる人あり。几帳のかたびらもあげられたれば、まぎるゝ所もなし。二十には二三たらぬほどのわかうどの、ふくらかにこえて、髮ふさやかにつやめきたるが、顔は、常陸のすけに、いとよくおぼえて、目おほきに、ひたひゝろくはれたり、鼻のわたり、口つきすべて、いひつゞくれど、世にめづらしく見にくしなどゝ、よのつねなり。色はさをにしろく、やうたひつしやかに、にきはゝしうわらゝかなり。よそひもなでしこの、わか葉

の色したるは、あかき人にはへ〳〵しかりぬべけれど、人がらには似つかはしからず、すさまじく、かぎりなうひなびて、ひずましなどのげす女といへど、よにかくはあらじ、そのこにて見るとも、いとけうとく、夷とこそいはめ。かりにも、都のうちにかゝる人立ましらんやは。まことに、鬼にやあらんと、おそろしうそもあだちがはらの黒塚にこもりしは、やさしからんものをと、たゞあきれたるやうにて、世のためしにもなりぬべき人よと思せば、よく是おきてんとて、又、見る人もなければ、思はずにさしいでゝ、此の几帳のうしろによりたち給へど、衣の音をだにしたまはねば、えしらぬにやと、心やすきに、香のかうばしさぞ、つゝみあへ給はず、ぬししらぬばかりなるを、あやしとおもへるさまにて、こよひは、いとめづらしき風もふくかな、みなみの風とて、かくもかほりけりなまだなれぬ心地こそすれど、いふ〳〵うち見まはしふと見付けるにや。おどろきまどひたるさまにて、あなむくつけすゞろなる男の、ここにいりたちけるよ。ぬす人にもぞある。人やあるをのこどもめして、とくおひうちねとのゝしるこゑは、たけきけだものゝ吠るやうにて、あまひこもひゞきわたり、いとおそろし。

（未完）

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の十二）

白松園主人

俊平が、夢中に於ける自問自答、即ち俊平に對する馬琴が評釋は、既に終れり。依りて、更に前にいひさしおきたる、秋布が病、俄に癒えて、九州をさして出發すといふ處に、立ちかへれり。左

の文章を味ふべし。

閑話休題、さる程に、秋布主従は、その曉に浪速を立ちて、三日四日さゆく程に、播磨さ備前の封疆なる、大山嶺の麓に來にけり。比は十二月のすゑつかた、梢の木の葉落盡して、松柏の操を顯はし、山川の流半涸れて、石の背も渡るに堪へたり。山は雲の上に雪を積みて、羊腸たる路絶ぬべく、里は萱の軒に塵を藏めて、燒火の儲け優なり。寒風肌膚を犯しては、遠砧の音も耳に留まり、群雁水田に氷を摧くさき、近村の堤も目にはるけし。一橋渡り果てゝ、亦一橋あり。一程行盡して、又一程長し。鄙曲にいへることあり、春は旅、夏は温泉に遂らまし、秋は野遊び、冬はこもり居。旅中の艱苦いづれはあれど、玄冬の寒けき朝、陽光の短き時、萬里の路をゆかんこさ、壯夫もなほ病めるに、況て嬋娟たる一婦女子の、霜を戴き雪を犯して、心づくしのあなたなる、肥の州遠くゆく程に…………

文藻の豐富にして、筆致の艶麗なる、誦することと幾回にして、感興に堪へざらしむ。此の段の文節の如きは、讀者須らく諳誦しおきて、自家藥籠中の材たらしめて可なり。「寒風肌膚を犯しては云云、群雁水田に氷を摧くとき」のあたり、又一橋渡り果てゝ亦一橋ありといひて、田舍の景をあらはし、之に次ぐに古人の詠句を出して修飾の具となし、更に玄冬のさむけきあした、と句を呼び起し、まして嬋娟たる一婦子の云云、心づくしのあなたなると受けたる、其の手際のほどいとめでたく、其の音琅々として恰も絲竹を皷するが如く、また金石を鳴すに似たりとやいはむ。扨てそのつぎを讀まむ。

大山嶺の路麓にて、秋布は舊病の猛に發りて、堪へねばかりに、痞に胸を苦めらるゝ、殊の難義に從平は、枯尾花を折敷せて、さまゞゝに、勦ろに、こゝは人家遙にして農夫旅客の過ぎるも稀なる、山麓の曠野なりければ、いさゞせん術なきものから懷にしたりける、丸藥を掻採り出して、疾用ゐんさしつれども、齒をくひしばりて受くべうもあらず、湯を乞はんにもよしのなければ、淸水なりさも掬びもて來て、沃ぎ入れ

んと遽はしく、彼此を見あるきつゝ、いと清らなる流水を、兩手に掬び揚れども、僅に四五歩の間に、水は、漏盡て、幾遍も亦勞して功なし、已ことを得ず掬びし水を、その儘に口に含みて、舊の所に歸來つ、病臥して果敢々々しくは、人こゝちもなきが如き秋布を、抱き起してやうやくに、丸藥とわが口づから、件の水を口中に移し入るゝに、藥は水と諸共に、受納りぬと思へども、痞はいまだ治まらず、抱けるまゝにつく〴〵と、その顔ばせをうち目戍れば、西施が心を病めるとき、太眞が渇を患ふる面影も、かくありけむと思ひつゝ、……

忠臣の龜鑑とも云はるべかりし俊平は、遂に心亂れぬ。冷えたる秋布が手足を、我が體温にてあたためなどせり。暫くして秋布は、とり詰められし痞も治つて、われにかへりて身邊を見れば、生平にはあらぬ俊平が、無禮なる介抱に、こは何事ぞと驚き怒りて、衝放さんとすれども、彼は心終に醉ひぬ。

嘯役室さま、二とせ以來忠と義の外には、胸に物もなかりし俊平が、かくまでに思ひまゐらするを、不便とはおぼさずや、總には長き病着を、看とり冊き朝な夕な、親しく仕へまゐらせし……下ゆく水も、濁江の深きまよひをいくたびか、われから、われを誡めて、磨けど曇る玉鉾の、道ならぬ思ひに、……

……

……譫語に呆るゝ秋布は、腹立しさに聲ふり立て、そは俊平むじんなり、和殿は惡魔の魅入れしか、年來浮きたることはなく、艮卒義僕と衆人に、黎められし身を恥もせで、叶はぬ事と知りながら、わらはを捕へて不義非道なる望みに返す言葉はあらず、こゝ放さずやと孰圍て、揮つ敲きつ、噛みつきて、もぎ放ちつゝ一反ばかり、走り退けども人家遠き、山脚の野邊にゆふこゑて、來る人もなき霜枯の、虫ならなくに吻く息と、烈く胸は地車の、長橋渡る心地して、怖氣たつさへ口惜しく、四下見らるる有繋は女子、悄く見せても目に脆き、涙ぞいとゞ進みける。

濡れぬ先こそ露をも厭へ、素より邪正の差別を知りての上なれば、よしや不忠と云はるとも非義横道と云はるとも、今更志を改めて、舊の素地にはなりがたしとて、止むべき氣色もなければ、詮

方盡きて、說き諭す言の葉も、うち惑はるゝ絶體絶命、狂人の前にはかくいひて、諫すより外なしと、

……擊、戰はんで、やよ俊平、世の常言にも、非道の前に道理なし、といふことあれば、義理を述べて云ひ懲すにはあらねど、心を鎭めて聞きねかし、迷ひにもせよ、思はるゝを、惜しとていふにはあらず、女子の身をもて親良人の仇を擊たん、とかくまでに、旅路の艱苦厭はぬわらはが、節操を捨てゝ阿容々と、和殿の望みに從はんや、宿望空しからずして、仇人嘉二郎を討捕らば、爾後はさもかくも、いはるゝまゝになる日もあらむ、時を俟たれば何事も、成就しがたきものぞとよ、こゝの道理を汲みわきて、迷ひを拂し給へかし、去歲の春鎌倉を、出でにし日より旦暮に、賴むは和殿のみなるに、心變りて主從が、今さら狹布のすば布胸あひ離くならんには、供にも立たじ倶しもてじ、別れ〳〵て枝挽む、この身ひとつで慈なく、何處までか行かるべき、さればさて速に、和殿のこゝろに從ひがたき、譯はたゞ今いへるが如し、わらはを貞女と云はするも、和殿が義士の名を顯ぐるも、今の迷を又翻の、忠義に返すのみぞかし。

聞きわき給へと理を推して、いひこしらゆる怜悧さは、あらしの風に悸はぬ、柳のいさゞ哀れなり。

俊平は、之を聞きて冷笑ひ、不義と知りつゝ、今更に思ひ切られぬは凡夫の執念なり。かく小兒を誑むくが如き虛言を信せんや、いつともわかぬ後を契りて、心長閑俟つ者あらんやとて、猶強てたわけき擧動に及ばんとせしかば、秋布今は諭すに甲斐なく、刀を揮つて、之を刺さんとせり。

手弱けれども烈女の魂、此の野の露と消ぬとも、汚されじとて懐なる命綱丸の短刀を、手ばやく晃りと引抜きて、胸前せめて衝きかくれば……

されども俊平は、之を事ともせざりき、即ち秋布がかよわき腕をかいつかみて、その刀を奪はんとせり。

刄を奪ひさらんとせしを、秋布はなほ奪はれじとて、柄は左右の手を掛けて、挑み爭ぶ一生懸命、その身を壓に蹌々と、蹌びかゝれば刀尖狂ひて、乳の下ぐさと刺貫きし、急所の深手に惱

吐もあらず、あつと呼びて仆れ伏す、俊平これに驚きて、こはこけいかにさばかりに、袴らまくすれば秋布は、頭を擡げ疾視て、怨めしきかな村澤俊平、汝が心の迷により、兩年このかた千辛萬苦の、旅宿も竟に仇となりて、親良人のかたきも得撃ず、非命に死する口惜しさよ、かうなるべしと知るならば、はやく肥前に赴きて、浦二郎ぬしを訪はましものを、外に資のなきのみならず、今は神にも佛にも、捨てられし身こそ悲しけれ、南無阿彌陀阿佛と唱へたる、言葉の中に唇の、色も變りて息絶ぬけり。

嗚呼節婦は、遂に毒刃の下に倒れぬ。俊平はいかになりしぞ。

こゝに至りて俊平は、茫然として手を叉き、頭を低れてゐたりしが、玉碎けて礎石の堅きを恨み、花散りて夜嵐の烈しきを憎む人の命のはかなかりしに、菩提の心やうやく萠して、迷ひの雲霧晴れしかば、絕地宿酒の醒めたる如く、頻りに慚愧後悔して、浩歎やる方もなかりしが、扨てあるべきにあらざれば、亡骸にうち向ひて、後室様某を、さぞな憎みても憎みあかなく、おぼすらめ、慾とはいひながら、あまりにいたく角ひたまひし刀尖の、狂ひしより深渓に命を陥されしは、是某が手をもつて、害し奉りしに異ならず、かくまで五逆十逆の罪を犯しゝ某は、身を牛裂にせらるとも、人見て足れりとすべきにあられど、切めてもの罪滅しに、時を移さず腹かき切て、死天の旅路に従ひまつらむ、死ぬる命は惜しからで、主の仇たる嘉二郎を、得うたざるこそ遺憾けれ、思へば善惡賢不肖、いづれはあれど人慾の、禁めがたきは魚の餌に、鈎あることを知りつゝも、餌を貪るに相似たり、迷へば小人悟れば賢者、懺悔も今は甲斐ぞなき、愚なる身を恨むるのみ、いでや自刑を行はんとて、諸肌脱ぎて刀を抜きとり、双に袖を卷き添へて、南無とばかりに刀尖を、肚へぐさと突きたつると、思へば頻りに腹痛して、愕然として驚き覺めけり。是曉方の夢にして、身はなほ雖波村にあり、夜半に臥したるまゝにして、行燈の油竭きて滅ねんとしつゝ幽なり。

此の條、夢を以て、情慾を懲す、之馬琴が微意の存する所なり。讀み去り讀み來るまに〳〵眉を顰め額に汗し、或はなげき、或は惜みて、卷を掩うてそゞろに浩歎に堪へず、噫そだちも終に氏には

及ばざるかと思ふとき、「頻りに腹痛して、愕然として驚きさめけり」といふに至り、讀む者亦愕然として覺めぬ。されど讀者が半信半疑のうちに葬られ來りしは事實なり、此の處に至り彌よ夢なるを確め得て、心始めて安んずるを得たり。

（以下次號）

茶話それ〳〵草（承前）

平安　故木崎得玄　述

孤峰庵　不羨寄贈

折ふしのうつり替るこそ、茶はあはれなれ。もの〻哀は、秋こそまされど。人毎にいふめれど、それもさるものにて。今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。秀吉公春比利休方へ御成の節、一疊大目にて、御茶あけられしに。天井よりひるかきして花生を釣り、糸櫻の咲みだれたるを、座中よりにしり上の口迄いけられたり、公御座入り被レ遊、御立もござしまさず、にじり寄らせ給ひ、席のかざり御上覽ありて、まうけの御座とて、枝ふりおのづから少しよけたる方へ御着座ましまし、不レ斜御きげんなりき。それより、又、風爐の頃になれば、若葉の梢涼しげに、杜若などほどよく生けれはせたるも、又、おかし。名殘をしげなるものは風爐なり。落葉のちら〳〵みゆる時分に、風爐にて茶を點るほど面白きものはなし。取あつめたる事は、秋のみぞ多かる。いひつゞくれば、晝殘せる茶の草紙などに、ことふりにたれど、同じ事、又、今さらいはじとにもあらず。さて冬枯の景色こそ、茶には中〳〵よるのるものなれ。ふくべなど持出、おもしろくすみ置き、

薫もの丶えならぬおとに閑寂を催し、夜咄しの茶こそ、とりわけのものなるに、今時の人夜咄しは前茶たつるものと斗心得たるゆゑ、かたはらいたき事こそ多かれ。曉の茶の湯斗おかしきものはあらじ。ねむげなる眼もとりの聲にともし火を引、俄にはなやかにうれしけなりとおもふ時。枕はづれて眼をはつちり。長きゆめをも見侍るものかな。(をはり)

不美曰く、折ふしのうつり替るこそ、茶はあはれなれ。ものの哀は、秋こそまされと人ことにいふめれど、實にさるものかは。四季折折のうつり替るにつけ、茶もあはれなれ。秋こそことに寂しく、人のいふこと茶のさまも同じく、やつれたる風爐に釜取合せ、松風の炎え音、まけもの丶水指島物の茶入に、繕ひ多き茶碗に、出喰有茶杓かけて、懐石の料理

と手輕に、我愛口の睦友をまねき、茶たてたらんは、いと興あるものならめ。今一きは心もうきたつものは、春のけしきにこそ。以下の文は、最妙なり。羽柴秀吉公程の英雄豪傑も、千ノ利休宗匠の方へ御成には、ほとほと御感心被レ爲レ在、所せき茶席に御入、御心美麗敷、一會の御茶をきこしめすなど、戰國の世にか丶る優美の遊びも茶にあらずんば、なし得べからず。ことに天井の蛭鍵に花生をつり、櫻の花のいとしたれたるうちに、設けの御座自ら有レ之、扱ぶりは、凡慮の及所にあらず。利休、其の人にあらざれば、迚も考案も起しかたからん。さりとて、後人、亦能、此の間似を難レ成からん。眞に柳はみどり、花は紅ゐの對句適當しけり。今日是をせんには、貴婦人など立派に出で立ち、うるはし

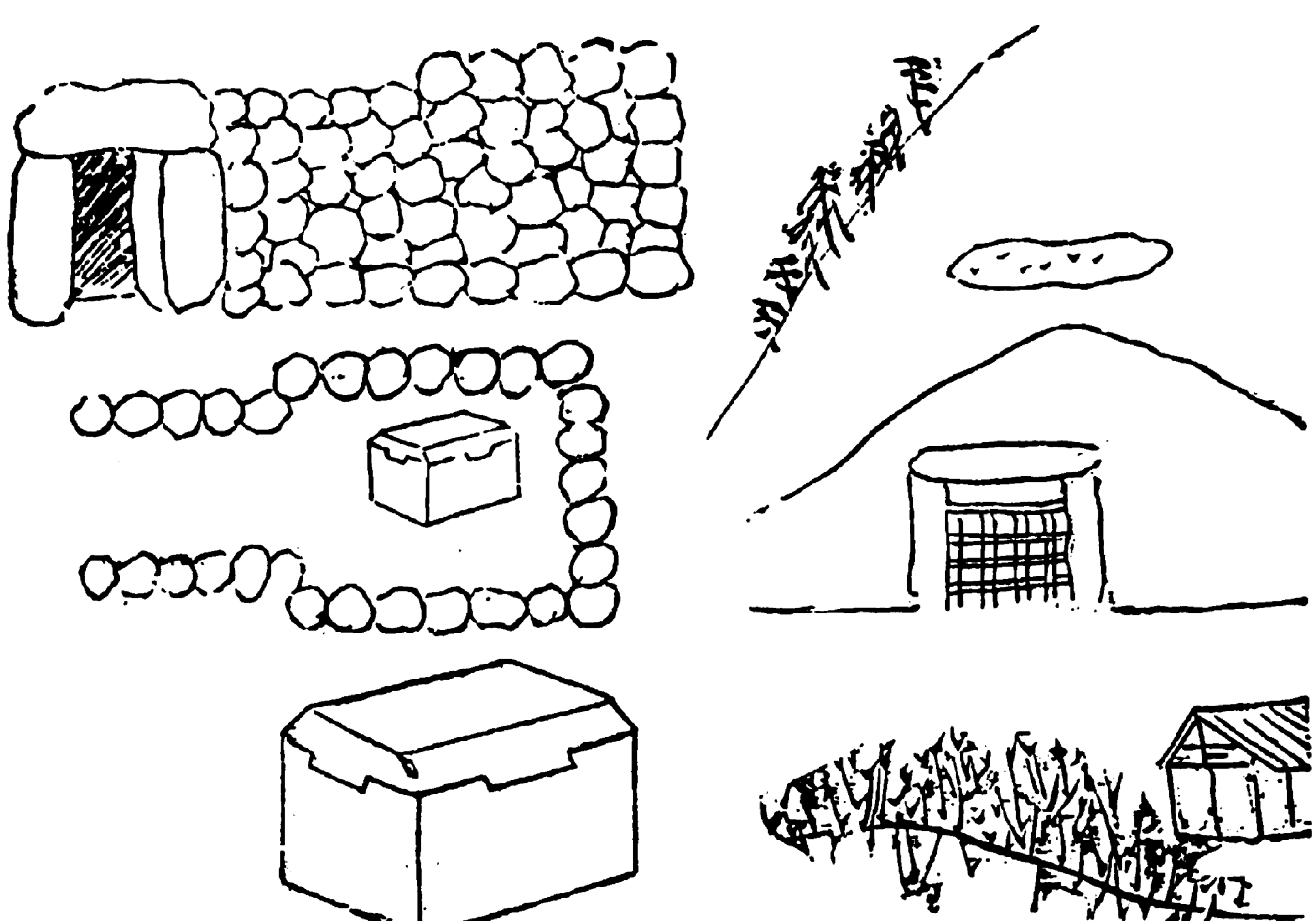
き道具をつらねて、是をなさば、如何あるらん。或は能、取合ならんか。諸嬢婦人の御一考も煩はしたし。又、初風爐の頃になれば、青葉の梢涼しげに、いともやさしきかきつばたなど生け、窓のすだれにそよ吹く風の通ひ來らんには、數寄屋に入るの心持は、如何ぞや。此の註を書ながら思ひやるも、又いといと樂しくよろこばしからずや。次に又、今更にいはしとにもあらず、冬枯の景色茶には、中々のるものなれど、是は冬になり、開爐したる處のさま、所謂口切寒さ催したる季節にて、爰に、此の人の腕力能見えたり。茶人年中の力の入れ所故、頗る立派に禮服を着用して、正式に出掛る好時節也。ふくべの炭取、やきものも、薫物にかはり、茶も新茶と成り、ひと際改まりて面白し。研究して、此の心持を知り玉へ。夜咄暁の茶の湯は、格外巧者老練ならでは、なしえざるものなれば、貴婦人社會には、敢て必要あるべからず。依て、暫く御預りに可レ仕。次にねむけなる眼も鳥の聲にさまし燈を引き、枕はづれて、長き夢見侍るものかなど、筆を止しは、輕く無念に大切の結びを付たるは、此の人の俊逸なる才と云べし。此の物語は、かくながく續るてとには思はざりしに、數回に亘り、諸嬢貴婦人の退屈をまねきしも、老予が罪御ゆるしをねぎ申になん。

大和みぐり（承前）

井上頼文

頼文いはく。圖中甲の石窟は、すべて、不規則なる天然の雜石を以てつまれたり。されど、天井も、左右も、丸き石あり長き石あり、方なる石あり、大なる石あり、小なる石あり、高くとがりて、さしいでたる、ひく〻くぼみて穴の如くなる、積みたてかたの幼稚なること、一見、第一期の末かとも覺ゆれど、石廓の構造と、石棺制作とを以て考ふれば、第二期のものなるべし。祝部土器の破片もやあると、ほのぐらきカンテラ振りたてつ〻、捜しもとむれども、豆ほどのも見あたらず、なほ、石のあはひなど〻思へど、あしき石油にて、油煙雲のごとくおこり、まなこをかすめ、鼻をおそひて、こまやかに見ること能はざりき。

甲の石窟第一圖

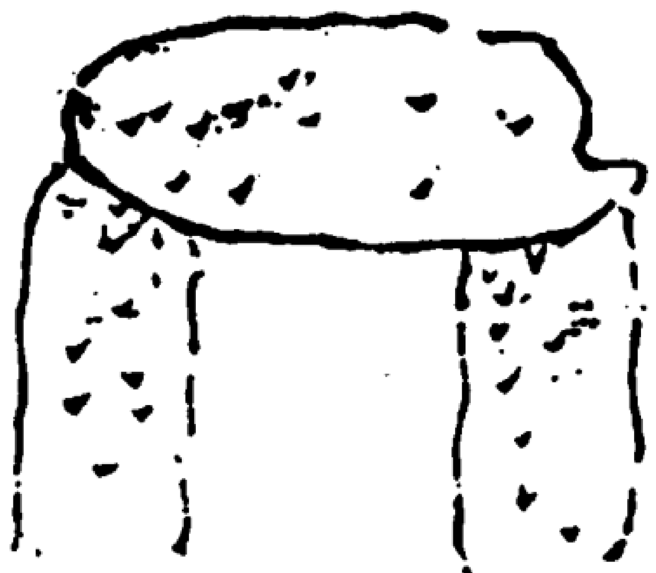


石窟の構造は、おほかた、左の略圖のごとし。されど巻尺、石華墨など、たちのいそぎに取り落したれば、間數などたゞしく記しがたく、たゞ、おほよそに見つもりて記せり。いとわかず口をし。

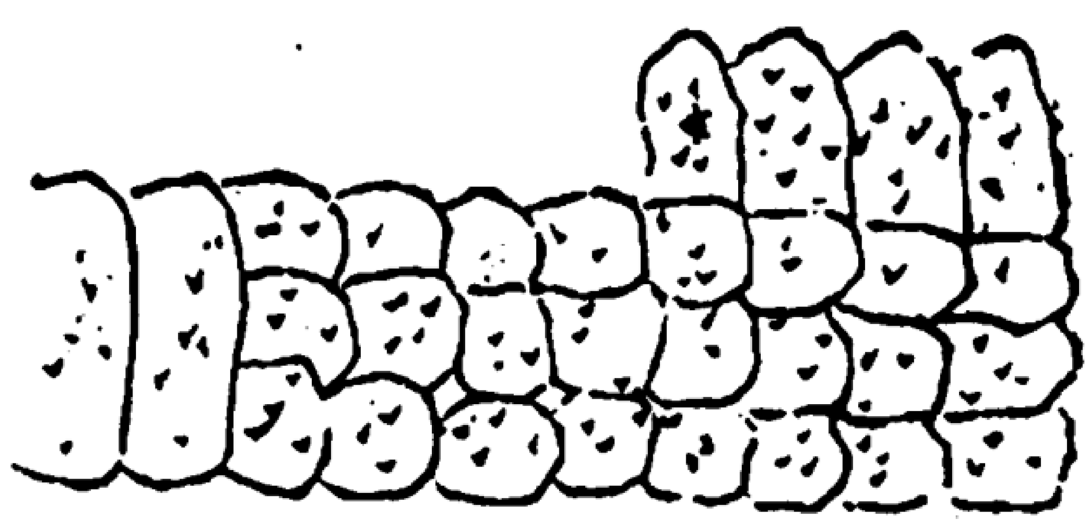
乙の石窟　安部晴明の社の拜殿の傍にあり。入口横四尺ばかり、高さ六尺ばかりあり。一間ほど入りたる所に小さき井戸あり、直經僅に二尺ばかりにて、濁水たゝへたり。此の水は、寺男が汲み入れたるものなるべし。井戸より、一段高くのぼれば、高八尺計、横九尺ばかりあり。天井石は、四疊敷ばかりの大石二枚にてたゝまれたり、構造は、甲のと、おほかた同く天然の雜石を以て築かれたれど、聊工夫を用ゐたるさま見ゆ。第二期の中頃にやあらん。副葬の寶器は、みな盗み取られて、今は、石棺だになし。たゞ、文珠の石像の奥の方に、たてるがさびしげに見ゆるのみ。年號や鏤りつけたると、さぐり見れど、ほのぐらくしてさだかならず。蜘の巣など裾にかゝりて、いとむつかし。例の瓦片もあらんかとたゝずむほどに、一行の人々は、はや文珠堂の方に走りゆきたり。おのれ一人のこるべきにあらねば、あたりの砂石をにらまへつゝ走る。

乙の石窟略圖

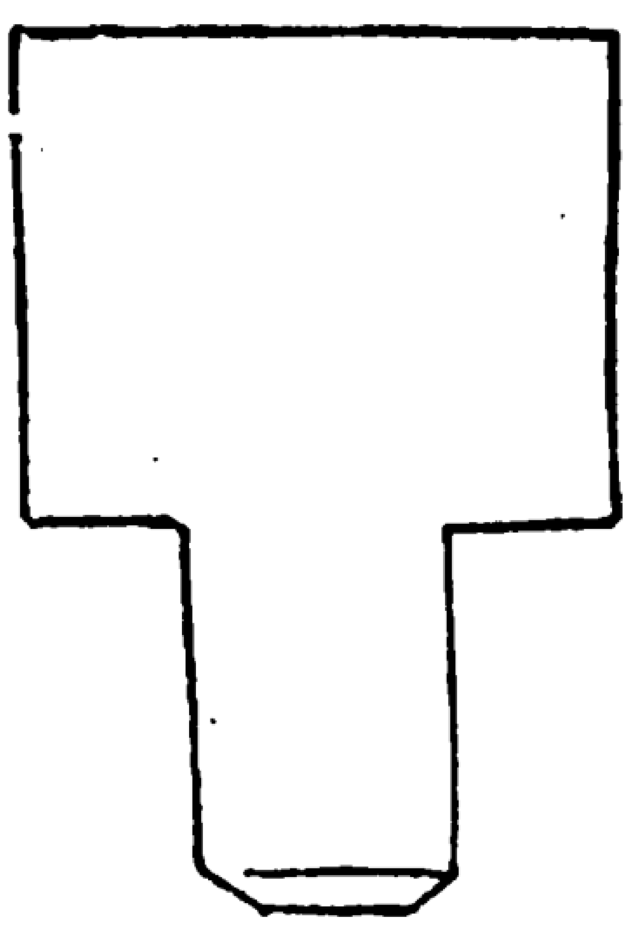
第二圖



第三圖



第四圖



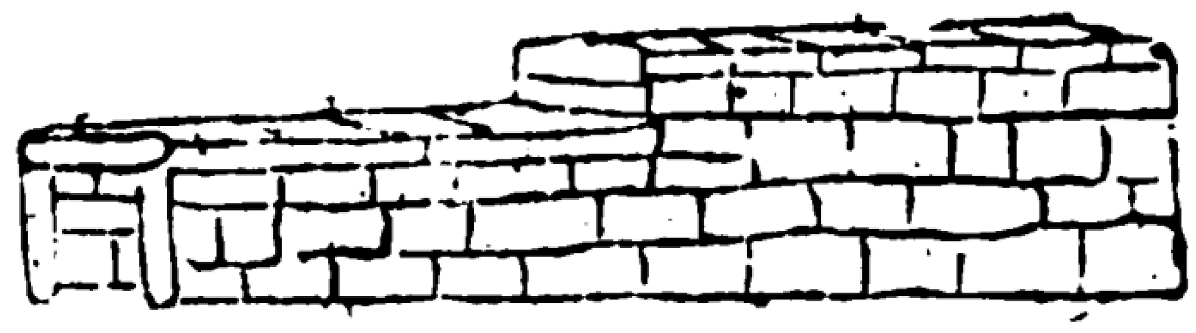
大塚氏の日記に、この第二の石窟を、琢磨雕鏤、ほどよく石をたゝみ積めるとかゝれたるは、ふと鐘樓の傍なる、第三の石窟と誤られたるなり。

丙の石窟　文珠堂の傍にあり、俗晴明の石屋といふ。美しき切り石もて築き立てたるが、その切石は光らんばかりに磨きたり。山邊の千塚に石廓の

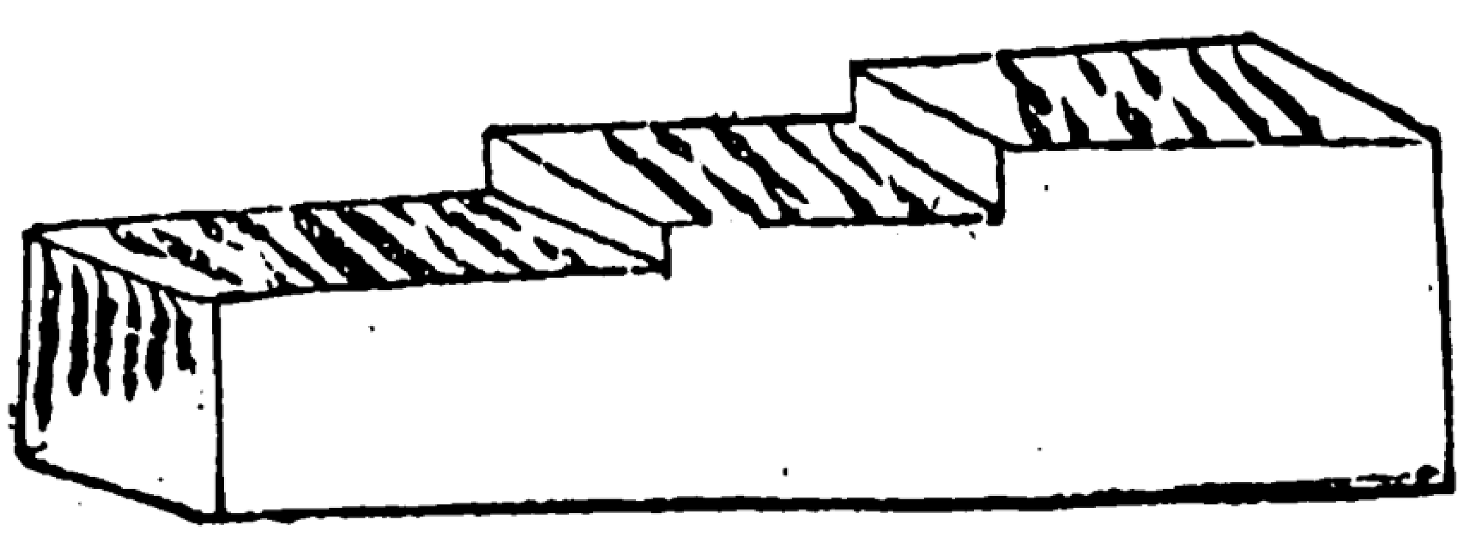
丙の石窟の略圖

岩がまへの内部より外面を想像したる圖

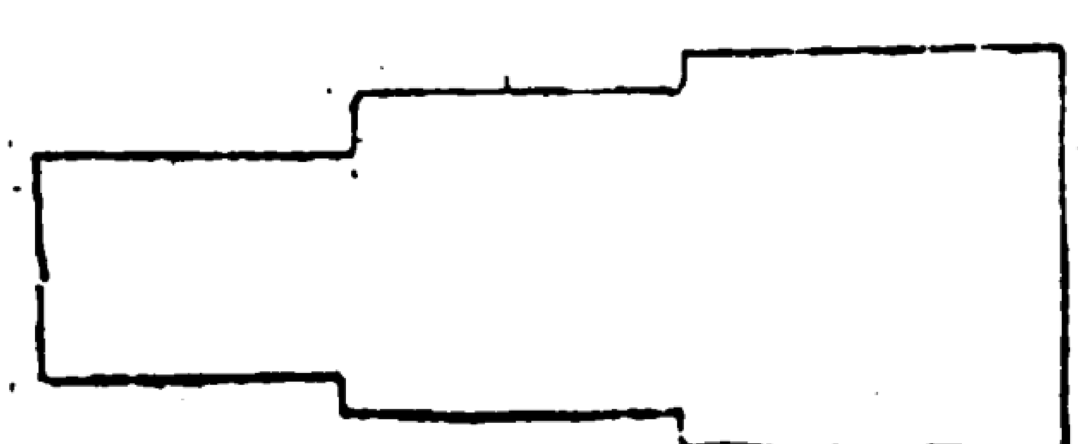
第五圖



第六圖



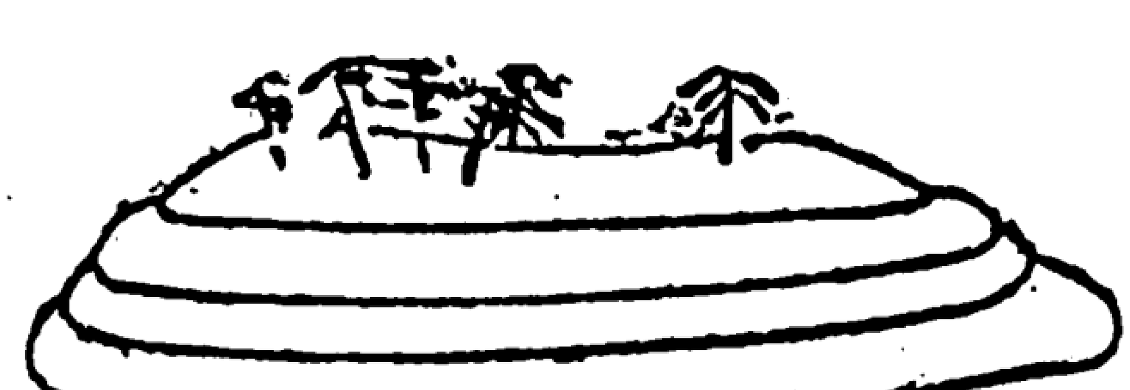
第七圖



顯れたるものおほかれど、かくばかり精巧なるはあらず、第二期の末か第三期の初ごろのものならんか、其の道の博士にとはまほし。

山はきりひらかれて、全形を存せず、察するに、文珠堂を建立せる時、構面を切り取りて、鐘樓をたて、安倍仲麿と、晴明との祠をたて拜殿をつくれる時、その前面を壞ちて、廓の口石を取り捨て、種々の寶器をうばひ、石棺もくだきて小川の橋などゝなしたるなるべし。今搆造方によりて考ふれば、前方後圓の車形なりしならん。桑田碧海は數のまぬかれがたきことわりとはいへ、かくとりこぼたるゝは、いとくちをしきかぎりなり。

第八圖



本居翁の

菅笠日記に、安倍文珠の岩屋は、高さも、廣さも七尺ばかり、奥へ三丈四五尺もあらむ。これも、昔、いとゞあがれる世に、たかき人を葬りし墓とこそおもはるれ。とも見えて、實に、皇族のにやあらん、豪族のにやあらん、なみ〳〵の人のにはあらざるべし。大和志には孝德紀に載せたる阿倍大臣の墓なりといへれどいかゞあらん。墳墓搆造の沿革にくはしき博士が、比較的の考究もて、その年代をさだめまはしきわざなりかし。

三夕

山岡螢雪

萩は、まだ早けれど、露に秋めきたる、奥庭、築山陰の小座敷は、殊に、靜に、近き乳屋の櫺が暮方に、二聲三聲程、鳴き立てしあとは、聯珠をかけたる露滴、草の葉末に啣つ、虫の聲ばかり、耳に立つ、おのが居室の椽先に立出でゝ、をりしも、冴え渡る空に、星影寒く、松の梢より漏れくる月の光を、燈火とはなして、過ぎし昔の歌書ども繙き、古人を友とし讀み行けど、俗多き我が心も、おのづから、澄み、身も、又俄に輕く覺えて、さながら羽化登仙の思ひ出でられ、風雅心も坐ろに起りたるものから、時こそよけれと、名にし逢ふ、三夕の歌を、まだ知り給はん、いとけなき媛たちにもと、拙き筆をとりて、そが略傳をぞ添えにける。

○寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり
まきたつやまの秋の夕ぐれ

法師は、初め藤原定長となん呼びける、僧俊海の

一子なり、才名高く、叔父俊成卿の養ひ子となり、中務少輔に任せられ、遠からず、家名をも續ぐべかりしが、俊成卿の嫡男、定家卿の生れ玉ひしかば、後の爭ともなりなんには、中々に心うしとや思ひけむ、自から避けて、なれし、綾、錦の衣々ども、打ち捨てつゝ、綠の黑髮惜げもなく、斬り落し、着なれぬ、墨染の袈裟、衣まとふ、法服圓頂の身とはなり、名を寂蓮とぞ改めける。

あはれ、一點の名譽、榮盛、華奢を羨む野心なく、其の名に負ふる、蓮の淤泥に汚されず、咲き匂ふ、淸き法師が心こそ、實にも床しき極みなれ。

寂蓮、素丹靑を善くし、特に、和歌に工なれば、秀歌も多く、世に傳へらる、時に、彼れが親しき友垣に、顯昭とて、學識優博の法師ありけり、顯昭、日ごろ和歌を以て、自負すれど、一つも秀歌を作り得ず、さるに、寂蓮は、學識、顯昭に劣るとはいへ、其の詠、特に、妙に造るものから、或日、顯昭は、徒然の餘り、寂蓮が草庵を訪れ、種種の話の末、和歌は藝に於いて、至難なるものに非ず、寂蓮學なくして、猶ほ、歌を能くすと、ののしりければ、寂蓮は、笑みて、天下の能くし難きもの、和歌に過ぐるはなし、顯昭の博學も、猶ほ、且つ能はざるなりと、云ひたれば、顯昭も、茫然として、得答ざりきとなん。

定家卿、深く法師の歌を重じ、常に、其の妙才を慕ひ、建仁二年七月廿日忽然として、法師が圓寂したまふに及び、いとゞ哀惜の涙に堪えざりきとかや、以て、寂蓮が、如何に和歌の妙手なりしかを、知るに足りなん。

○西行法師

心なき身にもあはれは知られけり
しぎたつさはの秋の夕くれ

西行は、素鎮守府將軍藤原秀郷朝臣の孫左衞門尉康清の子にて、左兵衛尉佐藤義清となむ呼びける、累世武を以て著はれ、義清に至り、特に、勇敢、射を善くし、頗る韜畧に通じ、鳥羽の御代に北面の侍士として、武名を、輦下に轟かしたる、若武者なりき、されど幼より、甚だ和歌を嗜みて、高妙に造詣するものから、上皇いたく其の才を愛し、何にくれと、厚く惠をかけさせ玉ひしが、尋常の者とはかはりて、毫も榮利を、むさぼる野心なく、常に遁世の志ありければ、偖は、撿非違使の官にも補せんにはと、旨を諭し玉ひしが、其の、職の、罪人を逮捕し、多く陰禍を招くものなればとて、固く辭みたるより、其の儘に打ち過ぎぬ。會、鳥羽新宮の工成りて、そが障子に、繪畫、又は、和歌など題すべきやう、一時の名家に令し玉ひたれば、義清も、又、御命をかしこみ、即座に、和歌十首を献上りしかば、叡感いと淺からず、御愛劍、朝日丸をぞ賜はりたる。

嘗て、同族、憲康と、鳥羽殿よりのかへるさ、明日も亦共に參朝せばやと、相約して立ち別れ、更け行く夜半の月影も、次第にうすらぎ、東雲つぐる曉鳥の、鳴き連れて、旭の影も東山に上るころ、庭の木立を吹き渡る朝風の、はだへ涼しく、早や出仕の時刻ともなれば、支度整へ、いそぎ、憲康が屋形に近づけば、悲げなる人々の哭き聲、いかめしき垣を漏れて、聞ゆるより、怪み訪れば、こは如何に、生者必滅とは云へ、昨日まで何事もなかりし、憲康の僅か一夜の中、暴にみまかり、早や此の世の人にもあらずなりなんとは、さりとも、思ひかけゝむや。義清惕然として、暫は言葉も得出でず、出家の志、益起り、今は、やる方なく、情を奏し、ひたすら官を辭したるに、上皇其の才

を惜を玉ひ、頓には許し玉はざりき。

かくて、すご〳〵と我が家に歸れば、今年四歳の稚子の、いとも愛らしく、父を迎へて袖にすがりつくを見ては、流石の義清も、親子の情にひかされ、氣も亂れて茫然たりしが、漸くにも我れに歸り、心强くも蹴て牀より墜したれど、女が慕ひ泣をあはれに、名殘惜くや思けひん、いたはりつゝ、其夜ひそかに、妻子を棄て、嵯峨に徃き、髮を落して、名を西行と改め、號を圓位と稱ふ、時僅に年廿三。彼れ、豪宕にして才を抱き、一朝無常を觀じては、最愛の妻子を棄て、毫も牽戀の情に、ほだされず、身を風雲に委て、東西の國、南北の州、遠きといへど至らざるなく、意を得れば、悠々として嘯咏自適するなどあはれ、其の心の床しさは、一輪の明月天空より落ち來りて、清水に宿るとや言はまし。

西行は最畸行に富む、天龍渡船の鞭撻、高雄山裡の會見、鎌倉終夜の講演、銀猫の放棄、慈圓の敎訓など、多けれど、今は略しぬ。嘗て、櫻花を詠じて、

ねがはくは花の下にて春死なん
　其の二月のもちづきの頃

と、其の望の空しからず、建久元年二月十六日京師にてみまかりぬ。

後鳥羽上皇かつて、の玉ふに、西行の才思は天成なり、常人の學び得る所に非ずと、以て其の人物を知るに足らんか、著書三四種、皆世に行はる。

○藤原定家

見渡せば花も紅葉もなかりけり
　浦のとまやの秋の夕ぐれ

定家卿は、俊成朝臣の長子にて、治承、壽永の間、正五位下に叙せられたれど、文治元年殿上にて、源雅行といさゝかの事より、いたく爭ひ、燭を

以て其の頰を批ちたるより、坐して籍を削らる。父俊成いたくこれを悲しみ、しば／＼歌を作りて、其の意を寓しければ、後白河法皇あはれにおぼしめし、本位に復させ玉ふ、こえて五年、左近衛少將を拜し、因幡安藝權介を兼ね、正四位下に進み、建仁中、佐近衛權中將に造り、美濃介を兼ぬ、時、既に歌名都下に喧しければ、後鳥羽上皇召出し玉ひ、小御所に詣り、和歌を判せしめ、面諭しての玉ふに、卿を延て此に至る、朕の卿を待する菲からずと爲す、宜く蘊底を磬盡し、遜避する處なかるべし、若し知て言はざれば、朕が、卿を召すの本意に非ずと、卿深く、其の知遇に、感銘したりと。

天久の初、勅して、源道貝、藤原家隆、同雅經等と共に、新古今和歌集を選ばしめ玉ふに、毎部皆冠する處、古人の歌を以てしたれば、上皇更に、勅して、定家、家隆等の所作を、部首に寘かしめ玉ふ、世之を、榮とし、羨ざるはなかりき。

承元の初、あまねく名家をして、最勝四天王院の障子に、名所の歌を作らしめ、上皇御躬ら、簡定し玉ひしに、定家卿の作、多く採用の榮を受けたりと、建曆三年從三位に叙せられ、建保中、參議、治部卿、正三位となり、尋で民部卿に遷り、貞應元年、參議を辭し、安貞元年從二位に叙せらる。卿の性、頗る競躁にして、進取に急はしく、才氣を負て、常に其の不遇を嘆き、怨言また、詠歌に、あらはれたりとか、されど、父は三位にて終りたるに、超えて、正二位に昇りたれば、卿、人に談りて、人臣の極位、何の幸か之に及ばんとて、大に悦びたりしとぞ。

貞永元年權中納言に任せられ、尋て帶劔をも聽さ

れたり。後堀川天皇勅して、新勅撰和歌集を撰ばしめ玉ふ、時に、帝禪位の御心あらせらるゝと聞き、日夜急ぎて、勉勵し、書成て、上りたりとなん。天福元年祝髮して、名を明靜と改め、仁治二年、八十年を一期として薨ず、世人稱して京極中納言と云へり。

卿、嘗て草堂を、嵯峨小倉山に設け、息遊の地となし、晩年之れに住はれたり。卿、頗る史傳に渉獵し、又詩を能くす、去れど、和歌の才に至りては、之を天資に得、縦横馳騁、精微を曲盡し、且つ家學に淵源し、奥義秘説、究めざるなきとか。其の家に在りて歌を作るや、必ず南面を洞開し、遠望す可からしめ、而して、整襟端坐、徐ろに筆を取るが例なりと、常に家人に談りて、曰く、平常清齋の中にて習ば、即ち、至尊の御前に侍り奉りても、失措するに至らず、又、いへる様、凡和歌を作らんと思ば、先づ、

故郷有レ母秋風涙。　旅館無レ人暮雨魂。
閣省花時錦帳下。　廬山雨夜草庵中。

の句を誦すれば、意格自ら高妙なりと、其の心を用ゐたる、斯の如く、名家として今も尚ほ、偏く人の敬ふところ、又、故なきにあらざるなり。

此の時に當り、諷詠大に起り、歌人多く輩出したれど、之等を視る、蔑如として、眼中に置かず、如何に、其の氣概の高遠なるかを、推しはからる、著書は、詠歌大概、毎月鈔、其の他少からず。又、百人一首の如きも、實に卿が編、皆、世に傳りぬ。

*　*　*　*　*

以上、三夕とは、秋の夕ぐれを詠じたる、歌仙の秀逸、三首を集め、かくは名づけたるものなり。右の三人は、いづれ劣らぬ、名家にしあれば、賤

が緒玉き、繰り返し繰り返しても、盡し難く、秀歌のいと多ければ、後の談草に、今は都て略しぬ。



曉風白露紀行（中）

白松園主人

△八月三日（一の坂越）

我が恩人富田ぬし、昨夜より來りて、我の家に宿り給へり。今朝しも疾く起きて、萩地に向はんとて準備せられつゝ、いかに共に行かずや、とそゝのかされて、俄に思ひ立ち、留守など人に頼みおきて、輕裝しつゝ、草鞋ふみしめて出でぬ。そもそも萩へ出づるには、山々ひたつゞきにて、俊嶺高坂重疊せり。此の頃新道を開きて、車馬の往來に便せしかども、迂廻して里程遥に遠くなりたれば、此の日舊道をさして上りぬ。山口町より北方の山間を進むこと里許にして、地務漸く高く、遂に一の坂の峻坂に達す。此の坂は縣道第一の嶮岨にして、勾配の急なる事さながら落すが如く、實に言語に絶せる難處なり。されば、維新前我が長州藩の、黨派相軋りし時も幾度か、此の嶮によりて奮鬪せり。屈曲して登る、その螺旋的の數幾百なるを知らず。汗は湧きて泉の如くなるに、此のうへ照らばいかにせん、と思ふに、をりから曉霧天におこりて、山の腰をたちこめたれど、日光も爲に遮ぎられて、幾分か力を得たる心地すれども、山の半腹なれば、風更に吹かずして、衣襟暑さを漏すによしなし。「驛」には屢々立ち止まりては息を繼ぎ、漸うにして傍なる人家に達しぬ。巖の

上より樋をもの して、溢れ落つる泉ありければ急はしく掬びて口を濕ほし、頭をうたしなどして暫く憩ひぬ。此の處人家四五軒あり。住めば住まるる物かな。如何にして生活すらむとおぼえて、あはれなり。殊に其の子弟は、日毎に此の坂をのぼり下りて、はる〴〵山口の小學校に通ふとぞ。その不幸のほど思ひやるゝに、都會の地に住む子弟は、かゝる處に住める人ありとも知らねば、更にその幸福なる事を知らず。雪のあした、雨のゆふべ、をさなき者の、いかにして通ふらむ、と餘りの險しさに懲りて、涙をこぼしぬ。

勇を皷して、ふたゝびのぼる。むかひより馬の背に燒炭負はして、鼻歌うたひながら、おり來る山がつ四五人あり。慣れてはさらに苦しとも思はざるらむ。おのれはもと健脚を誇る者なり。山道十五六里を行くとも、さばかり疲れざるが常なれど、此の坂ばかりはいとあぐみ果てぬ。まして體質強壯ならぬ富田ぬしは、なやましき氣色にて、おくれがちに、しば〴〵おのれを呼び留めて、しばし息をつがんと云はれぬ。今は坂なしと思へるに又坂あり。今は嶺ならんと思ふに、なほ遙なり。なやみ〳〵て、僅に山嶺にのぼる事を得たれば、我生きたりと叫びつゝ、麓はるかに見おろすに、山口市街眼下にありて、筑紫の海上煙波かすかなり。峯の松風そよふきて、芝生の上の露白く、谷間の杉の木のくれに、繡眼鳥の鳴く聲幽かに聞ゆ。此の山嶺を行くこと半町ばかりにして、松杉森々と生ひ茂れる處あり。その道のかたへなる岩角より、清水湧き出づ、その滑らかなる事似る者もなく、その冷やかなること氷の如し、こゝをもて土地の人之を金縮の水と稱す。爍日金を融すが如き日も、此の水ばかりは金石をも縮む、と

いふ意にもあらむか。麁なる家の老婆、此の清水の出づる口に、水槽をすゑて、之に湛へ、その中に心太といふ者を入れおきて、客に進むる料とし、その前に床几をすゑて休息の便とす。おのれ等ふたりは、急はしく之に腰うちかけ、さて此の清水を酌みて飲むに、その清冷なること、肺腑に透るが如く、その心太を啜るに、之また水に勝れり。よりて頭を洗ひ足に灑ぐに、痿れて久しく保ち難かり、是に於て、今迄暑に苦みしも、全く忘れはて丶、心地すが〲しくなりぬ。此の水混々と湧出して、如何なる大旱といへども涸る丶事なく、此の嶺を過ぐる人は、皆之を唯一の力草として、立ちよりて酌まずといふことなし。

佐々並といふところにて、旅店に入りて入浴し、酒を呼び晝餐を喫して、暫く疲を休むる時、袴を穿きたる書生の、二十むかりなるが入り來りて、おのれを見て忽地平伏して、疎濶を陳ぶ。よく見れば數月前まで、山口中學にありし生徒にて、今大阪の學校よりの歸途なりとぞ。體操教員千葉氏も、妻子を携へて、おのれより先だちて、此の處に休みをりしが、先づ出でぬ。午後二時といふに、ふたゝび起ちて發しぬ。此のたびは一升谷といふ峠を過ぐ。一の坂の如く嶮岨にはあらねど、馬の爪の、立ちもとまりがたき、こゞしき岩が根の、ぴたつゞきに續きたること四十丁。その一升谷と名づくるよしは、昔、ある人、此の峠の端につきしより、をりふし炒豆を一升ほど持ちたるが、ひとり旅のいと寂びしさに、ひとつ宛食ひつつ歩みしほどに、峠を終るころ、遂に一升の豆を食ひ盡し丶とぞ、之その名ある所以なりと云ひ傳へたり。四時の頃明木驛につきぬ。富田氏、今は一歩も運びがたしと云はる丶に、せん方なく、車

を求めてうち乘りつゝ、五時十分狀に着き、大坂屋といふ旅宿に投じぬ。富田氏の妻兄井川氏、近き處に在りけるが、入り來りぬ。三人は十時頃までうち飮みて、さて暑ければ、そのまゝ寢ねもせられず、散歩にとて出で行きて、歸りて寢ねしははや二時にも近かりけむ。

▲八月四日

午前九時、富田氏は急用いできて、鄕里なる大津をさして、うち立たれぬ。おのれ獨宿に居て、つれづれなるまゝ、午後よりおなじく宿をたちて、河添村とて、阿武川のわたりなる親族片山を訪ひて、しばしのやどりとす。二日三日のうちは、來訪者多かりしと、晝は暑さのはげしさとに、支へられて、名所舊跡を訪ふに隙なかりしは口惜しかりき。

▲八月八日

午後三時頃、井川氏とぶらひ來ぬ。即ち共に浮島といふ處の、弘法湯といふに至りぬ。阿武川その前を流れて、前山之に臨み、風光甚だ明媚なり。二人は引酌して之を稱しつゝ暮に至りしも、去るに忍びず、川風おもむろに吹き來りて、神爽かに、半輪の月白く東山の上にさしのぞきて、漪漣の立つもいと涼しやと、夜もすがら歸るを忘れ、夜もいたく更けにければ、そのまゝそこに一泊しぬ。いざやどかりて散るまでは見む。と昔の人の花を惜みけむこと、思ひ出でられてをかし。

思ひ出づるまゝの記

深山庵主人

(一) 蜻蛉釣り

ふる里なる我が家に隣りて、長サ二十間幅三四間とも思はるゝ堀ありけり。片かはゝ往來にして、かた側は美しき芝もて蔽はれ、鶴のこもらん樣なる老松の、五ッ六ッ立てる土手ありき。我が稚き程は、常に、此處に遊びて、母の危しと戒め給ふにも拘はず。夏の暑さに帽子をもかぶらで、日くらし、此の土手を走りめぐり、水の上を行き交ふ蜻蛉を釣るに余念なかりしが、今記臆するのみにても、三たび轉落して、三度救はれつ。堀の水は淺けれども、泥深く、浮草は、一面に、水の面を蔽ひたれば、救ひ上げられし時は、頭よりからだ惣體へ、青藻をかぶりけんことを其のかみを思へば、危くも、又可笑し。此の堀久しき後迄もありしが、一と年、京都より歸り見れば、松の古木は切り倒されて、薪とやなりけん。土手はくづされて、堀は埋められ了はんぬ。蜻蛉も、今は住まずなりけり。

(二) 動く陸地

こも又同じ程の時なりけり。私市といふ母の實家へ伴はれしことありけるが。今のごと田舍道に人力車といふものゝなければ、母と姉とは、駕籠に乘り稚き我は、荷物の片荷として、目籠てふ行李の如きものに入れられ、老僕の肩に擔がれ行きぬ。栗村川に來て初て、波立ち騷ぐ、大川を見、鯉鮒などの多く棲むよし、老僕の談に聞き惚れ居りし内何時しか渡舟の中に入りしも知らず、見渡せば、川の幅は次第〳〵に縮りて、向ふの岸は動きて、追々に近寄り來るに、子供心の不審に堪へざ

りしが、川を渡りて、後、姉は、駕籠と舟に醉ひて、心地勝れず、顔の色さへ靑ざめければ、我に代りて、目籠に入りつ。我は、駕籠に乘り、母の膝に凭りて、頻りに陸の動きし不思議を語り、先方へ着せし迄、同じ問題に母を苦めぬ。此の渡し、今は、百何十間と云ふペンキ塗りの橋かゝり、此の道、今は人力車の通行絶えず。姉は、廿五年に、母は、今年、共に亡せ給ひ、稚かりし我れは、二十九年の齡を重ねつ。

眼鏡先生

彦峰生

（下）

沼垂停車場に下りて、新潟に行くには、彼の信濃川に架けられてある、萬世橋を渡らなければならぬ。サテ、この萬世橋といふは、若し夫れダ、小學校の先生が、生徒の名前をかりて、懸賞記事文の募集に應ずる的の口調を以て、形容したならば、

龍の如く、虹の如く、蜿蜒として中空にかゝれるもの、之を萬世橋となす。

とでも云ひさうな、長いワ長いワ、其の長さ八百間。これを町數に換算すれば、十三町と廿間。これが、古昔の御姫樣にでも渡らせられやうものなら、御疲れ遊ばして、橋の眞中の欄干に凭れ、

テモ、マア、長い橋ではあるワイノー。

と御述懷わつたであらう。

閑話休題々々々々。葦原基風は、今や、この萬世橋の眞中に立つて、例の眼鏡ごしに、凝と信濃川を瞰下し、大に、また、慨嘆の意を洩して居る。



コレが日本一の長橋か。ナンダつまらない。緣日商人の賣ッて居る、盆庭の中に架かけた橋と何ぞえらばむダ。コンナものを、日本一と稱するのもすさまじいが、これを、また、日本一だと信じて居る國民のアハレさは、實に言はむかたもない。

何はともあれ、一跨のところを、御苦勞にも、橋板を一々ひろッてあるくでもあるまい。歐米漫遊の首途を祝して、この橋を一番、一跨に新潟へわたッて見せ、あはれなる人々の膽を冷させくれん。イエス、ヨールドゴールド、ビンベッドサンライス。

と、橋向の大川前は、船に乗る人、下りる人、客をおくるもの、迎へるもの、買物にはしるもの、ぶら〳〵するもの、所謂肩摩轂撃の其のなかを目がけて、葦原基風は、其の一跨を試みた。

タポン

と、みんなごと河心へ轉落ちた。多少、水ごゝろあるものなれば、容易に溺死することはないが、大變なことには、彼の眼鏡を何處へ失くした。

おッや、おや。この河のひろいことは。彼方へも此方へも一里もあるだらう。ソレニ、あの長い橋は何だい。アヽあれが先の萬世橋か。なんしてもコイツたまらん。オーイ、助けてくれ、たすけて——、たすけて——、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其の後、何年ばかりを經たであらう。一地方に、至極の謙遜家で、また、勉强家で、しかも、すべての事業に、熱心と誠實とを欠かぬ、といふので非常な人望を得て、郡會議員から縣會議員、目下は國會議員であるが、これまで一人の反對者なしに當選して居る葦原基風といふ人が居らるゝ。次の內閣交迭には、是非とも、大臣の机子ひとつを、この人にすゝめねばならぬとは、日本全國を通じての實際の輿望であッた。面貌は、たしかに其の人であるが、果して彼の眼鏡先生の葦原基風君であらうか。それにしては、當年の偉人豪傑を氣取る氣色は一向に見えなかッた。



待月　　東久世通禧

夕風にはなみかたよるはなすゝき
いてかてにする月まねくらん

社頭月　　高崎正風

千木高く月はのぼりてかみかきの
みたらし川のおとふけにけり

殘月　　鍋島直大

朝日かけにほへる空を出てみれば
しらみてのこるありあけの月

秋草吹き亂れたり　　津輕承昭

さきみてる眞萩きちかふ露なから
手折てもゆくあきの野べかな

晴夜月　　大谷光尊

ともし火の影もけたれててる月の
ひかりみちたる窓のうちかな

月下薄　　竹屋光昭

あきらけき月のひかりに武藏野の
尾花のそてもみえわたるかな

ねさめに虫を聞く　　前田利鬯

小夜深くねさめてきけばわか庭は
皆むしの音となりにけるかな

月下虫　　水野忠敬

さやかにも月すみ渡るよもきふの
庭にさひしきむしのこゑかな

閨虫　　長谷信成

閨ちかく虫の音きゝてねたる夜は
のへに宿かるこゝちこそすれ

月前雞　　前田利昭

こよひ此の月のひかりにはとりも
いねやかぬらん聲のきこゆる

月明らかなる夜友來り　　西三條實義

おもしろく月見るこよひ嬉しくも
契らぬともにとはれけるかな

聞虫　　岡部讓

むしの音をきゝにと來しもわけかねつ

つゆに聲ある野邊のくさむら

秋旅　宮地嚴夫

もゝ草のはな野の月にわくかれて
旅おもしろき夜半もありけり

遠山月　北郷久政

すみのぼる月のひかりにうち渡す
遠やままゆも見えそめにけり

朝秋風　坂正臣

有明のつきよりおろすあさかぜに
のきのかつらの露ぞこぼるゝ

曉露　植松有經

おく露に影をのこしてあけにけり
淺茅かはらのありあけの月

水上月　小出粲

水とりはまたこぬいけにすむ月の
かけ寒きまであきふけにけり

暮れ行く空に月出たり　鎌田正夫

寫し畫のこゝちこそすれ夕からす
かへるとやまをいづる月かけ

庭秋草　千葉胤明

朝な朝なさかりすきゆくあさかほに
さきかはりけりにはの秋はぎ

蘆洲月　遠山英一

蘆の葉のそよく夜風も身にしみて
すさきの月夜かげふけにけり

雨中虫　岩崎勝從

ふる雨の音しづかにもさよ更て
鳴く虫のねぞさやけかりける

夏風　小西甚之助

たきものゝ香はたもたねど夏の日の
窓こそかをれみんなみの風

あさがほ　三輪義方

しのゝめの露すゝしくもみゆるかな
みつのいろなるあさかほの花

暮れ行く空に月出たり　蜂須賀随子

秋風になびく尾はなのすゑくれて
ほのめきわたるゆふ月のかけ

閑居薄　鍋島榮子

むらすゝき高く繁りておのつから
世にかくれたる庵となりにき

雨中虫　前田朗子

ふる雨のたえまはあれとなく虫の
聲をやみなきにはのあさち生

深山月　南郷柳子

雲きりのふかき山路におもはすも
はれたる月のかけを見るかな

終夜見月　岩崎寧子

秋の夜の月見のゆかにおもふとち
かたふくまての影をみしかな

水上月　小池道子

秋の夜の月すみわたるかはみつに
よこきる雁のかけも見えつゝ

苔徑露　松平健子

柴人のかよひ路たえてこけむしろ
あきこそ露のおきところなれ

曉月　小川直子

身にしみて詠められけりさし櫛の
あかつきふかき月のひかりは

河邊月　中村禮子

うちなびく尾花の外のかけもなし
野川のきしのあきの夜のつき

夕月照松　服部磯子

秋かせに夕きりはれてやまのはの
まつの並木につきてりわたる

消息の末に

千葉胤明

大磯なる大隈伯爵の別業にありたるころよめる中に

うちよする浪のしふきの心ちして
　夕立すなり磯のまつ原

大森海水浴にものして

わかために涼しき風は袖の海
　いて行く舟の追手なりけり

鮫津の川崎やにて

白浪の立ちや歸らむ手枕の
　夏のさめつに雨ふりいてぬ

月夜に目黒よりかへるさ

とり／＼に鳴なるむしの聲きゝて
　月のかけふむ里の中道

こゝろの花

井上頼文

夏花　山岸光徹

はしゐして風まつ袖にかをるなり
　まかきのうはら軒のたちはな

夏夜

河くまにかゝりたくなり夕立の
　濁をしほにさてやさすらむ

夏燈

飛虫のかけさへみえて木隱の
　苔路涼しき庭のともし火

夏池

夏くれば池に棹さす人もなし
　蓮と菱との浮葉のみして

水底もてる日にわきてたきるらむ

たゆけに浮ふ池のうろくつ

夏山家

谷河の笹魚づり得て酒くまむ
水の音すゝし山かけのいは

雁來紅

讃岐　小西甚之助

秋艸のなへて哀深かるに、ひとり哀をよそに匂ひやかなるは、雁來紅にそわめる。夕露の玉章結ぶ懐かしさに、入る日の名殘はえ〱しう、色を重ねる錦の葉月の庭げしき、なか〱に如月の花の園にも劣らぬこゝちす。そよと吹く池の凉風にゆらけるさまは、鳳凰の尾を動かすが如く見えつるより、聖代の恵も深く眺め入るに、君か千歳をまつ虫のはやわたり淸けくなき初むるは、乙女が振の袂をや、おのか鼓に舞はさせん心かな。けに立ち並ぶ垣ほの乙女、朱の袂の匂ひやかさよ。秋ぎつからの紫もうらうへに色奪はれ、千種の艸葉はた其の緑うせなんとす。初かりの聲聞くとゝもにめてたかりしに、かうも盛りの艶光麗色、今にも出でん山の端に月たゆたふも宜なめり。哀れそも誰が手に染めし色なるそ。啼きわたる曉の空鴈の涙やかうも濃染に染めてけん。

稻毛日記（承前）

石搏千亦

奥村ぬしのうた、道々の歌など、山崎ぬしに見せければ、ぬし、われもとて、かきて見せられける

けふこゝに立わかるともみ熊野の
うらのまつ風おとづれはせよ

松の琴に浪のつゞみをうちそへて
きみが門出をいはふけふかな

みくまの丶浦にすむとなわすれ貝
ひろはで千代をかさねてよ君

さ丶やきよする浪のさま見むと、打つれだちて濱におりたつ。右の方に鳥居あり。何の神の鎮まりますにかとゆきて見れば、その奥に又一つの鳥居あり。石打しきたる果に祠あり。このわたりのけしきを、こ丶に集めたるやうなり。されど濱邊より見むは、岡にて見るに劣れりとて、又打つれだちて歸りぬ。かへりておのれ

下つふさの稲毛のさとは君ゆゑに
永くわすらへぬ名と成にけり

雑報



●御慰問使北京に向ふ　去月三十日夜、天津に着したる在清軍隊御慰問使、岡澤侍從武官長の一行は、去し三日、天津各隊の巡視を終り、同日北京に向け出發したる旨電報ありたる由。

●東宮殿下並びに妃殿下還啓　久しう日光田母澤御用邸に御避暑中なりし、兩殿下には、いにし十二日、雨天にも拘はらせられず、かねて定め玉ひし如く、午前十一時二十分上野着臨時滊車にて、御歸京せさせ玉ひぬ。同列車には、中山從一位も、御陪乘を許され、中山太夫、高辻侍從長、清水谷山路等各東宮武官、大迫、鍋島等各侍從、渡邊、

西郷等各侍醫、萬里小路正親町、吉見、生源寺等各女官供奉し、上野停車場、御安着の上同所まで奉迎の大山元帥、土方伯、川口宮内次官、香川皇后宮太夫、黒田東宮武官長、大浦警視總監、千家東京府知事、九條道實公、長崎山内、田中稲葉等式部官伊藤御用掛外數名の宮内官に御會釋あり、御料の御馬車にて、順路還御あらせられき。

●日光小學校の光榮　皇太子殿下には、去にし十一日山内御散歩の途次、日光尋常高等小學校に御立寄あそばされしが當日は揚石町長、岡田校長は、門外に職員生徒は、前庭に整列して、君が代を奏し、殿下には、畏くも、生徒の敬禮に御帽子取り、御答禮あらせられたり。夫より、御眞影奉安室に入らせられ、御小憩の後揚石町長岡田校長に、特に拜謁を許され、尋常科四年、球算同一學年(女)作文同(男)讀書、同二學年(女)算術同(男)習字、高等三四學年(女)唱歌、同(男)兵式體操等、各教室を御巡覽の上十時三十分御還御遊ばされたり。又、町長助役等には、若干の金員を下し賜ひたるよし承はりぬ。

●東宮勳章捧呈の事　韓國全權公使趙臯式氏は、天皇陛下へ過日謁見勳章捧呈の砌り　皇太子殿下への勳章をも、同時奉進すべきや否やを奉伺したりしが、右は　皇太子殿下御歸京の上、親しく捧呈すべしとの御沙汰ありしに付、不日青山御所に參伺し、金尺大勳章を奉進する筈なりとぞ。

●露帝の閑院宮殿下御饗應　露國新聞の報する所に依るに、去にし七月十二日露帝は、ペテルゴフ大宮殿のペトロウスキイの間に於て、當時、露京、御滯在中の閑院宮載仁親王殿下を御饗應あらせらるゝ事と爲り、同夜、定刻の八時を報ずると

共に、先づ、皇后アシキサントラ陛下には、閑院宮殿下と手を携へて、徐々ペトロウスキイの間に入らせられ、各皇族殿下、之に次く、續々、御入あり、豫て設けの宴席の中央の二脚に兩陛下着御あると共に、閑院宮殿下、皇后陛下の右に座を賜り、其の次に、各皇族、幷に、貴賓、都合二十三名列席し、又、皇帝陛下の右方には、希臘オリガ皇后、皇太子ミハイル親王殿下を始め、同二十三名の列席者あり。兩陛下に相對して、侍從伯爵ベンワンドルフ少將、座を賜り、其の右には、我が、特命全權公使、小村壽太郎、次に、外務大臣代理ヲムストルフ伯、村田陸軍大佐、外露國顯官と、我が公使館員數名、列席し、ベンケンドルフ伯の左方には、岩倉公爵、陸軍大臣クロパトキン將軍を始め露國の顯官、幷に、我が公使館員列席し、宴間、露帝、先づ起て、杯を舉げ、閑院宮殿下の壽を祝され、次で、閑院宮殿下、杯を舉げて、兩陛下、幷に、各皇族殿下の爲に、萬歲を唱へられたり。宴終りて、後、兩陛下、閑院宮殿下、幷に、各皇族と共に、ペトロウスキイの間より、奇草芳花を以て飾られたる看樓に出でさせられ、茲にて、咖啡の御饗應あり。樓下にては、宮中音樂隊妙音を奏して、最と鄭重の御待遇なりしと承りぬ。

●同宮殿下の御歸着　閑院宮殿下は、去にし七日の午前五時横濱へ御安着、夫より御休憩の後、午前八時五十五分、横濱發滊車にて、御出迎の御息所殿下、及、三宮夫人花房別當、並に、家令家從の諸氏と御同車にて、九時五十分新橋停車場に御安着の上、樓上に於て、御出迎の皇族殿下に、御對顔あらせられ、次に各大臣、親任官等に拜謁を賜はり、十時三十分頃御馬車にて、御歸邸相成

りたり。當日新橋迄出迎へたるは、東宮御使鍋島侍從、小松宮彰仁親王、同依仁親王、山階宮菊麿王三殿下を始め奉り、各大臣文武高等官無慮五百餘名なり。

●御參内　閑院宮載仁親王殿下には昨朝御歸邸後暫時御休憩の上、午前十一時頃宮中北御車寄より御參内あらせられ、　兩陛下へ御對顏、種々御旅中の御物語あり、御晝餐後、少時にして御歸邸あらせられたり。

●兩内親王御參内　いにし十日午後一時五十分、新橋着列車にて、箱根宮の下より還御相成りたる、富美宮　泰宮兩内親王殿下には、翌十一日午前十時三十分、佐々木御養育主任、外女官數名を召倶し、宮中に御參内　兩陛下に御對顏あらせられ、同十一時過ぎ御退出あらせられたり。

●禎子女王殿下御歸京　伏見宮禎子女王殿下には、大磯山内侯爵邸に於て、御避暑中なりしが、いにし十二日午後五時廿八分新橋着の滊車にて、御歸京遊ばされたり。

●名譽の死傷者　北京の我公使館護衛として、軍艦愛宕より派遣せし、陸戰隊員（將校一人、下士卒二十四人）中死傷者左の如し。

即死
二等水兵　河内三吉　三等水兵　町野兵右衛門
三等水兵　磯貝榮藏　三等水兵　高田佐太郎

重傷を負ひ間もなく死亡
二等水兵　鎌田萬次郎

重傷を負ひ入院中の者（但し二回負傷）
二等兵曹　小笠原由太郎　一等鍛冶　朽木綱張
二等水兵　小栗文治郎　三等水兵　清水竹五郎
三等本兵　草薙善治

重傷を負ふ但し目下全治に近き者
一等水兵　高野忠吉

重傷を負ふ但し目下全治の者
一等信號兵　三田定吉

重傷を負ふ但し目下全治の者
三等兵曹　岡田瀧次郎　一等水兵　佐藤啓次郎
一等信號兵　池田鶴藏　二等水兵　間瀬淺次郎
二等水兵　内海幸四郎　二等水兵　澁谷宇吉
三等水兵　阿久津辰之亟

●三孝子　山口縣吉敷郡下宇野合村野村梅藏と

いふは、資性温厚にして、幼より、克く父母に事へ、父病中は、日夜寒暑を冒して看護に力を盡し、父の死後は、一意其の母に孝養を盡し、志操を變ぜざる、數年一日の如く、又、都濃郡鹿野村白川光藏といふは、他より入りて、白川家を襲げるものなるが、舅姑に事へて孝養怠らず。舅姑の病に伏するや、妻ナヲと共に、專ら、看護に力を竭し、嗜好を供し、心思を慰め、一意承歡、數年一日の如き、共に、奇特の行爲あるを以て、梅藏、光藏の二人は、各々、木盃一個、ナヲは、金一圓を賞與せられたり。

●北京籠城談　西公使夫人並びに楢原未亡人、中川一等軍醫夫妻其他北京籠城者の一行十餘名が御用船小倉丸に搭じて門司に入港せし時某通信員が一行を同船に訪ひ聽取したる北京籠城談なり主として、西夫人の談話を錄せるものなりと云へば讀者、其の心して讀まれよかし。

△西公使夫人　病餘今尚全く恢復せずとて、甲板上の長椅子に横はり乍ら、「コンナ失禮を致して御免下さい」との前提の下に、徐々として語らく、妾は彼方に參りますと、氣候の爲なんでせう、如何も身體が勝れませんでして、騷動の起ります以前から、ベッと床に計り就て居ましたので、精しい事は、一向存じません。あの騷が大分烈しくなッて、多分六月の廿二日と覺えますが、……他の奥さん方と共に、下女なども、一緒に皆英吉利公使館に參ました、……英吉利公使館へ參つた、日本の婦人ですか、左樣、石井さん楢原さん中川さん、それから小川工學士の奥さんと、妾とで都合五人、別に理髮師のかみさんと看護婦とが、一人、下婢なども、總て二十八人も居たで御座いませう。

▲食物も最初の中　　は英吉利公使館やロバートハートさんなどの家に蓄へてあるものを戴て居たのですが、其も暫してなくなつたので、後には、皆さんの食料の爲に乘馬を日に二頭、宛、屠ることになりました、乘馬を總べて七十頭も殺したさうで、後には、英吉利公使館の愛馬までも食べたのださうで御座います。馬だと知りますと何うも戴かれませんでしてね、夫に馬が鐵砲に擊れて鳴く聲を聞たり、肉のまだ温くてピクリピクリと動くのを料理するのを見ましては、猶の事ね……、だけれど後には、そんな事もいツて居られませんで、妾も永らくお馬のソップを戴て居りました、他に滋養物と申しては、ほんとに何もないのですからねへ。

▲西洋の婦人は　平素でも活潑ですが、騷動の最中にも、一體に元氣で御座いました、中には、亞米利加公使のお孃さんのやうに、聯合野戰病院の有志看護婦になつて居る人も多くありますしね、それから一番皆が、驚きましたのは、ハンガー(？)ホテルの主婦で、ホテルの客が英吉利公使館に參つて居て、それに食料を運ぶ爲に、毎日々々自分の處から馬車に乘て、公使館へ來るのですね。其の馬車には、亞鉛板で、圍をして小銃の丸を防ぎ、自分は小銃を擔で、其の中に座て居てどんな激しい攻擊のある時でも平氣で時間をも違へずに公使館に來て居たさうです。此の主婦は、後に戰鬪員の足りなくなつた時、進んで義勇兵のやうなものになつて、銃劍がないものですから、小銃の端に西洋の出刄庖丁を結び付けて、戰線に出て、銃眼の處まで進んださうです。妾共でもどうせ一通の覺悟は極て居りましたから、身體さへ動いたなら、少し位の御用も出來たのでしやうけれど、

病身なものは何につけても、不仕合せで非常に殘念に思つて居りました。

▲公使も妾の病氣の事を申しまして、病氣でないならば、こんなに自分の國の公使館を出て、外國の公使館に來るのではないといつて居りました、それでも、公使は始終公使館に歸つて居りまして、後には、只一人で公使館に寢泊りをした程です。日本の公使館は、程餘危險で小銃の丸は、屢々、飛んで來るし、現に公使が書齋で本を讀んで居る時に、扉一つ隔てた隣室に大砲の丸が來て破裂した程でしたから、柴さんなんぞは、大層御心配なすつて、餘程御止になつたけれど、矢張り氣になると見えまして、常に日本公使館に歸て居て、折々哨兵線などを見廻る者ですから、柴さんから嚴しく叱られたさうで御座います。前にも申しました通り、西洋の婦人は、大層活潑なのも御座いましたけれど、何分多い中ですから、又中には、

▲日本人の眼から見ると可笑しい樣なのもありましたさうです。それは、敵の攻擊のない時は、少しも平日と變らずに庭に出て御亭主さんや小供等と一緒に遊んで居て、顏色も平常と違はない程大膽でありますが、少し砲聲でも烈しくなると、さア大變、その御亭主さんを捕へて居て、放さない大きな聲をして、ダヽをこねるので御座います。どうしても、日本とは風俗や習慣が變つて居て、感情を發表するのに大膽だからで御座いませうね、おしなべて、申しまするど、西洋の婦人は、日本人などよりも、飛放れて活潑な方があると共に、日本人の眼から見ると、如何はしいのもあつたやうに噂さ致します。日本の婦人はとても、西洋の人と比べて決してキツヽはありませんでしたらうけれど、仕合な事に日本人は感情を抑制して、

發表しないといふ事には慣れて居りますので、大した不體裁もなかつたのは、誠に結構なことだと思て居ります。妾は、北京に參りますと、夫婦交る代る病氣に罹り、其の上、思ひも懸けぬ、こんな騒動に遭遇まして、非常な困難を嘗めましたが、でも御一緒に公使館に居た方の中には、

▲楢原さん始め、義勇隊や、陸戰隊の人の中にも、誠に御氣の毒なのが多いので御座いますから、之を思ひますと妾達は未だ幸だと諦めて居るので御座います。妾は、船には餘程弱い方で御座いますが、身體が今に充分でありませんから、矢張都合さへよければ、此處から横濱まで船で參る心算で御座います。(完)

●籠城婦人還る　西公使夫人故楢原書記官未亡人、及、令嬢令息等は、愈々去にし十二日午後四時新橋に着せられたり。西鄕侯爵（楢原夫人の父君）同夫人令嬢をはじめ、靑木外相、同夫人同令孃、戸田伯爵夫人鍋島侯爵夫人、田中宮内大臣夫人、川口同次官夫人、及、大山陸相、兒島惟謙得能印刷局長、及、女子同情會員、板垣伯爵夫人、下田歌子女史、原れい子氏等を始め、會員一同出迎はれたれば、プラットホームは、列車の到着前、已に立錐の地なく、兩夫人親近の婦人たちは、何れも早く涙を催し、誰も彼も歡び迎んよりは、寧ろ楢原夫人の境遇を察して、いと打しめりて見えたりき。西鄕侯爵は、例の愛想よき擧動の中にも、いく度も時計を取出し向を眺め兒島氏のションボりと佇めるなど、何れも、出迎人の情を引きて、いと氣の毒に思はれぬ。かくて、四時五分前、やうやう列車は到着したり。某氏まづ旭旗に包み、故書記官の遺骨を抱きて下車するや、西鄕侯爵夫人、第一に列車に近寄られたれば、西公使夫人、

及び、その令孃につぎて、下車せられたる楢原夫人は、令息を侯爵夫人の手に渡たされ、潛然と涙ぐまれたれば、人々一層堪へやらぬ心地し、爭そうて、未亡人のまへに進み握手を求められ、此に混雜中の西夫人は、靑木外相に助けられて、ステーションを出で、用意の馬車に同乘せらるゝまでは、未亡人は、尙を下り立たれたる儘にて、プラツトホームにありたるが、附添の某氏に促がされて、まづ、西鄕侯爵は、故書記官の遺骨を擁し、乘車せられたる後に、侯爵夫人は、未亡人の手を取りて、次なる馬車に上られ、西鄕邸に向はれたり。令息は、人見知もせず、初めて抱かるゝ祖母君の手にニコ〳〵と打笑み、令孃も、乳母に抱かれ同行したり。西夫人も、病後の事とて、非常に憔悴し、楢原夫人は、殊にもやつれて見るからに氣の毒に堪へざりき。安藤大尉、兒島外交官補の遺骨も、同時に着したりとぞ。

●女學校

▲女子師範學校の設置　目下文部省に於て取調中の師範學校令中改正法は、學科課程改正の外敎員養成の上に於て、大改正を施し、先づ、其の速成法としては、敎員講習科を擴張すると同時に、從來女子部は、各地方の情況に依り、設置することゝなりたるを改め、男子師範學校の外、別に女子師範學校を設置するか、若しくは、從來の如く、女子部を置くか、兎に角、女子師範校を設くるを以て、原則となす方針なりと云ふ。目下男子師範學校の外特に女子師範學校を置くものは、大阪に於ける女子師範學校と、本年九月より開校せらるゝ、東京と新潟の二師範學校のみなり。其他は、土地の情況に依り、師範學校内に女子部

を併置するもの二十餘縣にして、全く置かざるもの過半なれば、今回改正師範學校には、大に女子部を奬勵する筈なりと云ふ。

▲小學校令と女教員　現今小學校女教員の數は男教員に比し、極めて、少數なるが、從來に在りては、女教員は、左程、特別なる必要は感ぜざりしなり、今度小學學令改正の結果、男女學級を異にする場合あることゝなりたるを以て、女學級に在りては、時に却て、女教員を以て之に充つるを適當とすることとなしとせず。從て、將來に比し其の需用を增加すべきこととなるか、目下の處、女教員は、師範學校に於て、養成することゝせるも地方の如きは、至て少數にして、到底此の必要に應ずべくもあらざれば、文部省に於ても、今後同教員の養成奬勵に向て計畫する處あるべしと。

▲神田三崎町の國語傳習所は、昨年來女子高等師範の國語專修科、及び、地理歷史專修科豫備科を設け、授業せしが、二回とも非常に好成績を得たるより、本月中旬より、更に文科理科の受驗豫備科をも新設して、來年四月の入學試驗に應ぜしむる計畫の由。●新潟縣女子師範學校は、かねて、古志郡長岡本町に新築中なりしが、愈々落成せしを以て、去月、移轉せり。●過般米國より歸朝せし女子高等師範學校訓導、安井てつ子氏は、今回同校教授兼舍監に任ぜらる。●麴町下二番町の成女學校内に開かれたりし料理講習會は、非常の盛況を以て、講習を終り、去八日證書授與式を行へり、當日は三輪田眞佐子棚橋絢子兩女史も、臨席せられたりと。●京都府高等女學校は、兼て記せし如く、去る一日を以て、寺町の新築校舍に移轉せり。●山形縣には四個の高等女學校ありながら師範學校には女子部の設けあらざるより、此の程

同縣知事は、縣參事會に向つて、次の諸問案を提出したりと、一師範女子部を設置する必要なきか二もしありとせば、之を男子部と併置すべきか、三はた、又、獨立して設置すべきか、四或は、山形高等女學校(市立)を一の縣立として、之に併置すべきか。●下總佐原女學校内に開かれたりし薄茶式講習會は、去月末、證書授與式を行へり。●信州上伊那染縫講習會は、西田講師と會員との熱心にて、豫定よりも、大に進歩し、まづ木綿染の織法を終り、尚絹毛糸の染法、及び、絹織物の初歩捺染法友禪染等を講了し、又、各種の染物は、勿論十數反の織物を實習し、去月廿八日、證書授與式を行へり、僅々二十八日間の講習にて、此の實績をあげしは、意外なりしと云ふ。●廣島市の中國紡績會社にては、過般來寄宿工女の品行を督勵せんため、十歳以上二十五歳以下の工女を二組に分ちて、毎夜二時間づゝ、讀書算術習字等を教授し來りしが、成蹟良好なるを以て、追て完備したる、一教場を設くる筈なりと。

●佛國人日本婦人評　人見一太郎氏の巴里通信に、日本婦人の評と題して佛人の評を聞くに、「世界一週」内に歌舞する日本婦人は、殆んど總て少女といはんよりは、赤んぼうらしきところあり。赤んぼうらしき風姿を、長く保存するは、實に困難にして、佛國婦人の難しとするところ、日本婦人の美質に此に在り。其の奏するところの音樂は吾れ少しも解せず、東洋的音樂を玩味するは西人に取りて頗る困難也。踊に至りては、優美閑雅にして、頗る目を樂ましむるに足る、爪哇婦人の踊の如き、固より其の比にあらざるなりといふが見えたりき。もと、これ、賤しき或者について下されたる評なれば、いふには足らぬことにあれど

日本婦人の美、豈それ、斯くのごとき者に止らむや。況んや、其の匹例を爪哇婦人にとられたるが如き、彼賤輩、果して、わが榮譽を汚せり。

●婦人會　本社が、曩に賞をかけて、汎く江湖に對ひて、切實完美なる、地方に於ける婦人會の規則を求めしは、專ら、各地方の急に應ぜむがためなりき。こゝに、愛媛教育協會新居部會にて、西條婦人會といふを組織せられ、去月末、その發會式を擧げられしが。其の主旨、組織は、本社が當選等と認めたりし、師岡須賀子氏の立案せるものに遵據せられたるものにして、即ち左の如し。本社は、深く、微衷の、世に容れられたるを喜び、また、極めて、速に世の用を爲しゝを榮とす。

西條婦人會規則

第一條　本會は本邦固有の道義により女子の淑德を養成し兼て日常必須の知識を得しむるを以て目的とす

第二條　本會を西條婦人會と稱す

第三條　本會の事務所を西條高等小學校に置く

第四條　本會は其目的を達せんが爲に漸次左の事業を實行す

講義　談話　實習　研究　慈善事業

第五條　本會の會員を左の三種とす

特別會員　普通會員　賛助員

一特別會員は德望學識あり經驗ある婦人及本會に特殊の功勞あるものを推選す

一普通會員は品行方正にして十五年以上の女子とす

一賛助員は男女に拘はらず金品を寄附し若しくは會の爲に盡力をなすものゝ中にて會長之を推薦す

第六條　入會せんとするものは住所姓名族籍年齡を認め戶主の連署を以て本會事務所に届け出べし

第七條　入會を諾したる上は會員證を渡すへし

第八條　會員は猥に退會する事を免さす若し止むを得さる事故あるときは戶主の連署を以て其事由を届出つへし

第九條　本會の會費は左の規定に由る

一會員は會費として毎月金三錢以內を本會へ出すへし但し特別の事情あるものは徵集せさる事あるべし

第十條　金員を寄附せんとするものは目錄を記し本會事務所に差出すべし

第十一條　本會の集會日時は左の如し

一例會每月一回日曜日午後一時より四時までとす

一懇親會は毎年壹回　皇后宮御誕辰五月廿八日とす
其他臨時會合を要すべき時は三日以前に之を通報すべし
第十二條　本會に左の役員を置く
會頭壹名　會務を總理す
副會頭壹名會頭を補佐し會頭事故あるときは代理す
幹事四名　會頭の旨を請け各自會務を分擔す　會頭指名を以て之を選任す但し二名庶務二名會計を司る
評議員十名　會頭の諮詢に應じて會務を評議す　會頭指名を以て選任す
幹事評議員の任期を滿壹ヶ年とす

●信州松本町の婦人慈愛會は基本金募集のため去月音樂會を開きぬ彈箏謡曲琵琶等あり終りに聖公會のホーラ氏夫妻外二名の英語唱歌ありて頗る盛會なりし由●赤十字社京都支部にては去る一日看護婦人會例を河原町藥師共樂館支店に開きぬ出席者は會長村雲日榮公副會長高崎夫人其他百餘名にして過日來募集せし恤兵金九百圓の内にて慰問寄贈品を購入する事とし其物品撰擇の結果扇子及び手巾二千五百寄贈する事殘金は救護資金中に積立置くべき事同會役員の一人は右物品を携帶して廣島へ赴くべき事等を决議し終つて山口軍醫正の講話看護婦の繃帶演習等ありて散會したる由●北海道小樽婦人會は去る二日量徳女子小學校にて講話會を開き同地巡遊中の大内靑巒氏も臨席して一場の談話を試みたりと●信州上水内郡柳原婦人會は寺田六三郎、坂本瀨兵衛、淸水對治其外村内重立ちたる人々の盡力にて昨年發會式をあげたるが僅に春秋二回の常集會と年一回の懇親會とのみにては目的を達しがたしなどいひ居る人もありと

女鑑歌文月次兼題

十月五日　歌　霧中露
　　　　　文　秋夜の感
右九月廿二日〆切

十月廿日　歌　山初雪
　　　　　文　新刊書籍を贈るに添ふる文
右十月七日〆切

十一月五日　歌　奉祝天長節
　　　　　　文　菊をめづる詞
右十月廿二日〆切



教の庭

九月廿日兼題

涼風

天　鹿兒島市山下町　丹下花子

しらつゆの玉もてかざるはぎのとに
すゞしくかよふあきのはつかせ

地　大阪市北區中ノ島六丁目　松尾富美子

おのづからひるの暑さもわすられて
たもとすゞしきにはのゆふかせ

人　香川縣師範學校內　有信やす子

すゞしさにあきゝにけりと思ふかな
すゞみがをかのまつのしたかせ

（以下原稿到着順）

いつしかと秋は來ぬらんむしの音も
身にしみそむるかぜのおとかな　松尾せい子

すゝしくも松のうれよりふきおちて
くさにこゑやむやまのひたかぜ　佐藤千代子

すゑ遂に身にしもしまむあきかぜは
すゞしきそてやはしめなるらむ　村上操子

いつの間に秋やきにけんこのごろは
あさなゆふなのかぜのすゞしさ　田村多豆子

朝ゆふはころもでさふくおぼゆけり
あふきはするゝそればかりかは　上原のぶ子

たへかねし昨日のあつさわすれけり
たもとすずしくかよふあさかぜ　德永萬壽子

白たへのころも手すずしながめやる
つきよりあきのかぜやたつらん　德永廣子

この頃のまたるゝものは月をおきて
そてふきかへすいふたつのかぜ　稲原蓁子

たちそめしたきのうは葉のあき風は
おときくのみもすゞしかりけり　永井さい子

いさひける夏はやさりてきのふけふ
すゞしきあきのゆふぐれのかぜ　頴川ちか子

霧はるゝそらにおさげのかぜそひて
身にしむほどもすゞしかりけり　服部倫子

さら〳〵と音もすゞしくきこゆけり　友永章子

なつをのがれしたけのしたかぜ

池みづはまこもそよぎてさゞなみに　山代由子
つきもくだくるかぜのすゞしさ

一むらの小ささの葉するゑそよさふく　佐々小學子
かぜのおとこそすずしかりけり

秋かぜのこゑかあらぬかさばかりに　佐々有鄰子
あさげすゞしくなりにけるかな

したびよる木の下みちをふくかせは　佐藤玄子
あきにもまさるここちこそすれ

やまかげのしば生に眞柴をりしきて　濱口貞子
あつさをよそにすずかぜそふく

吹く風のきのふにかはるすゞしさに　山田稻子
ならすあふぎもけふはわすれつ

庭の面にみつうちそゝきはしゐして　田代艶子
こよひもすゞしき風やまたまし

文まなぶまさにこよなくうれしきは　田代綾子
なつをほかなるかぜにこそあれ

まさにふく竹のはこしのしたかせは　荻原章子
いさゝすゞしきものにこそあれ

あをやぎのまれく木陰はすゞしくて　松尾くに子
なれもあふぎもわすられにけり

涼しさはすのこのもとにはし居して　青木たま子

たもとにつゝむかぜにこそあれ

いつのまに萩のうはばにかよけけん　椎野ぬき子
けさふきそむるにはのあきかぜ

くれたけの葉わけの露につきみねて　椎野秀子
なつもたもとにかよふあきかぜ

人しれずあきやきにけんにはもせの　椎野薫子
このまをはらふかぜのすゞしさ

なつころもまたぬきかへぬはつ秋に　椎野清子
はたへすゞしきはきのうはかせ

わき出るいづみのもとにたちよれは　椎野鋭子
かたへあきなるかぜのするらん

たきつせの音をしたひてたちよれば　丸木靜江子
ふきくるかぜのすゞしかりけり

青すだれふきまくかぜのすゞしさに　梅村花子
しばしあふきもわすれけるかな

わが庭のいけのはすはのしらたまも　中川芳尾子
くたけてすゞしなつのゆふかぜ

秋しらぬ日かげはいよゝそふまゝに　河野みち子
ならすあふぎのかぜのすゞしさ

あふぎさへいつか忘れてゆふぐれの　藤井りゑ子
そでにまちさるかぜのすゞしさ

日もすがら業なしをへてまづさ憩ふ　關勝子

ゆふべすゞしきあきのはつかぜ

秋ぐさのつゆにいろますはなゆゑに
すゞしきかぜもいさふこのごろ　石川類子

たか殿の小すやおろさむこのゆふべ
すゞしきかぜのそでにあまれる　石川樂子

露しげきのべの千くさをわけゆけば
すゞしきかぜにたまぞちりける　石川なゑ子

すゞしさは袖にあまりてはら〳〵さ
つゆもこぼるゝあきのゆふかぜ　石川久子

花すゝきまねくたもとにあきたちて
ころもですゞしのべのゆふかぜ　米澤都留子

涼しさをなにゝたとへんそでのうら
なみさわぐまでゆふかぜぞよぐ　松原千鶴子

夕さればかど田のいなばうちなびき
たもとすゝしくかぜぞふきくる　北島功子

雨すぎてつゆすふせみの鳴くにはに
かよふもすゞしねぶのしたかぜ　小森藤枝子

のきはふくかぜ心ちよくなりにけり
にはにはあきのいろゝみえねさ　島津龜久野子

手なれてしあふぎわすれて涼むまで
ゆふべのにはにかぜわたるなり　神田秀子

ひさかたの月すみわたるいけのおもに
さゝなみたてゝかぜわたるなり　小野花子

月やどるにはのあさぢのしらつゆを
うちゆるがしてわたるゆふかぜ　臼井美屋子

さらぬだにしげる木かげは涼しきに
かぜこそかよへなつのゆふぐれ　前川翠子

秋かぜのふきそめしよりあつからず
またさむからずすゝしかりけり　鎌田きよ子

こほりうる聲さへたへてゆふかぜも
すゝしきわきになりにけるかな　高石登代子

朝ぼらけはぎのうはゝにつゆみえて
みにしむばかりかぜわたるなり　牧衆子

いちはやく秋來にけりとおもふまで
そでふきかへしかぜのすゝしさ　毛馬内優子

山ふかみひと知るまじさかくるゝを
あきや訪ふらんすゞかぜのふく　坪井はま子

うきなつもしらですぎゆくやま里は
すゞしきかぜのふけばなるらん　遠藤旬子

朝またき吹きいるかぜのすゞしきに
ころも手かろくあきをおぼゆる　森このゑ子

このまゝよりふきくる風もおのづから
すゞしくかよふまつむしのこゑ　辻さみ子

あつさなほ去りやられども朝ゆふの　篠田圓子

かぜはすゞしくなりにけるかな

あきの野の千草にそよぐすゞかぜに
ありしあつさもわすられにけり　榎本照子

九月廿日兼題

陰徳

人　大阪市北区中之島六丁目　松尾せい子

古き歌に「物みなを恵の露はよるひかる玉よりもけにたふとかりけり」と詠まれし如く、慈仁の心は、陰徳の一にして、最も能く、女子の天性にかなへるものなりとかや。たゞ、同じ人の上のみならず、鳥獸をも憐み、非情の草木をもいとふなる人は、身も安らかに、其の香はしき心の花は、おのづから、いづかたまでも匂ひわたらなん。されど、大かたは、あらはに徳を行へど、かげにては、かひなしとやうに思ふめり。貧しき人に物を惠み、病みたる人を勞るなど、もとより、優れたる行なれど、おの〳〵、身のほどに財を節し、身をつみて人の痛さを知り、己が欲せざる所は人に施さじと、惡しき事をば小なりとも斥け、善き事を行ひ、人を妬まず、謗らず、世の爲、人の爲つくしなば、やがて、めでたき報のなくてやは。

人　山口縣都濃郡末武下村　村上操子

むかし、何とかいひけむ人、子孫の爲には、金銀をたくはへおかむか。それも、愚なるものいでゝ、つかひつくさば、かひなかるべし。田畑さはにもとめおかむか。それも、なか〳〵に、己が業をおこたるよすがとなりぬべし。書籍あまた求めおかば、螢雪の光に、其の身もかゞやきて、家もさかゆべし。されど、こも、よまざらば、徒に、紙魚のすみかとならむ。さらば、世には、子孫の爲に、殘しおくべきものもなしと、ひとたびは、打なげきたりしが、はたと手をうちて、これあり。子孫の繁榮のもとは、陰徳なりとて、其の後は、もはら、陰徳を施しつとなむ。實に、陰徳を施すは、人の爲にして人の爲ならず。むかしより、是が爲に、いえがたき病をいやし、さだまれる齡

をのばへ、くさ〲の幸福を得たるためしは、すくなからず。吾身のみかは、延きては、子孫のさかえをもおこすは、只、これより外に、もとむべきものもなし。げに、積善之家有餘慶の古語は、誣ゆべからずなむ。

人　　　和泉國泉北郡澤井村　福原董子

そも陰德とは、いかなる事をか云ふ。人の知らざるところに、善を行ひ德を積むをこそ云ふなれ。彼の、漢土の叔傲といふ人の、兩頭の蛇を殺して、人の憂を防ぎ壽を以て終りしめでたさも、此の陰德の一つになん。さればにや、古語にも、陰德あれば陽報ありと。げに、うべなりけり。すべて、一向に財をちらし、黃金をなげうつのみを陰德とは云ふべからず。世に生とし生ける草木にまでも、仁を施こしあはれみを垂るゝを云ふなり。されど、陰德の中にも、名利をかへり見ざる君子の陰德と、また、おのれの名を人に知らしめんためとか、あるは、譽れを世に買はんためとか、あるは、未來に其の果報あらん事を期して行ふ、小人の陰德との二種ありとか。同じ善を行ふ中にも、後者より前者のごとき、赤心より發する眞正の仁心をこそ、陰德とはいふべけれ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

司馬氏家訓にいはく、金をつみ。書を積みて、子孫にのこすといへども、能く守り、能くよます、冥々の中に、陰德をつみて、以て、子孫長久の計をなさんにはしかず云云。それ、陰德とは、神明のまします所にして、我が一心のもとつくところなり。貧民をすくひ、生命をを助け、往來を便にし、國家の爲に、丹誠を盡し、子孫永久をねがふ、皆、陰德なり。なにごとも、神明に恥ざる、心よりすることは、冥冥の中につもる陰德といふ。これには、必ず、陽報あるなり。人みな、つとむべきは、陰德にこそ。

小森藤枝子

陰德あれば陽報ありとかや。げにさる例いと多かり。世には、うはべをのみかざりて、心は蛇蝎の如く、にくましきもの少なからず。これたとへんか。かなりゆかしきうばらの花、手折らば、とげの身をさゝむ。あな、恐しとも恐し。また、これにたがひて、身はかざらざるも、心のうちはいと淸らかに正しきものあり。さながら、海のおもては波たてど、底には水も靜にて、

眞珠の光かゞやけるが如し。なべて、善にはうつりがたく、惡には習ひやすし。かくても、末の世にはいかがなり行らんと思へば、いとわびしくて、甲斐なき涙に袖をうるほしぬ。人に心は畠なれや。よき種まきて養はゞ、などか、實入のあらざらん。よしよき種は蒔きぬとも、艸を苅るをた怠らば、たなつもの、はた、いかにして收むべき。そもく、陰徳は、利慾の爲にするものにあらず。もはら、おれがま心より出でたる善行をこそいふべけれ。されば、始より、かゝる徳を施さば、かゝる報いを受けんなどゝ、頼み心をもつべきにはあらざるなり。世には、なかくに、陰徳ある人をそしりあざけるものあり。言語道斷の極とぞいふべき。正義の人をいたむるは、天を欺くものとぞいはん。水の流を山にのぼせ、砂もて索に綯ふべしや。人たるもの、いかに、けだかき才藝ありと雖も、徳行なきときは、面こそ人なれ、心は獸にもたぐへつべし。本とすべき心、既にかくの如し。人たるべき價値、はた、何れにかある。陰徳は、修徳の上につきて、最も純潔なるものなり。そのなすわざに至りては、くさぐさあれども、人の、まことにふむべき道は、たゞ一筋にこそ。

遠藤旬子

陰徳ほど、いみしう、貴きものは、あらじかし。なべての世は、名をうり、利を得ん事にのみ、はしれるを。何ほどの、施しをなしたればとて、直に報の來つるべきにもあらず・人のしりて、賞めそやすにもあらず。自らも、世にしらさんを願はされば、まして、報などの來るは、なほ、心にもとめざればなり。近頃、西の國より、文明といふあたらしき、風の吹き來れるより、又、あしき弊もともなひ來つ。よろつの事、こと〴〵く腐實的になりさかれるも、あさましう、口惜しきかぎりにこそ。

篠田圓子

人の前にての善行は、誰もなせ共、人知れぬ所にて、徳を行ふものは、いと少し。たとへば、たまく、陰にて善き事をなし、後に至りても、其の爲し置かれたる人、一言の謝も云はぬとて、あまり、はりあひ、なしなどゝ、よしや、口には出さぬ迄も、心に恨まば、折角の善行も、水の沫となるべし。されども、凡夫たる身には、つゝしみても、多少其の心、浮ばぬにはあらず。そこを、みづから戒しむるこそ、誠の人なれ・又は、養育院の如き所、或は、他國に天災など有りし際、あまたの黄金を惠むは、此の上もなき事ながら、これ見よがしに、我名をも記したらむには、忽ち、人皆の知るところとなりて、一時は大に評判よろしかるべけれど、さては、陰徳と云ふべきものにあらず。たとへ、人知れず惠みたり共、斯く爲し置かばいつしかは己に歸るならむなどゝ、はじめより、報の來るを待つ心ありて、なさば、同じく徳にあらずして、欲なり。故に、陰徳を積むといふ事は、萬事にいたりたる人ならでは、行ひがたかるべし。とはいへ、唯人のためのみ、はかりて、己の身立たぬやうの事

ありては、却て悪しければ、なべての人、よく前後を、かへりみしつゝ、徳を積まむとの心かけ、あらまほし。多くの中には、人情を失ひ、人を倒しても己は立たむとの考へを持ち居る人、なきにしもあらず。是等は、この尊き、み國のためにとりては、いと口をしき限りにこそ。實に、さる人には、常に、この陰徳の二字を、見せ置き度事になむ。

立秋

丸井八重子

梧の一葉のさき立つは
　秋立つあさのしるしなり
夜すがらすだく虫のねは
　秋立つ夜半のしるしなり
かなたの峰は紅葉して
　こなたの里のかきの根に
夏のなごりを忍びてか
　いろもあせたる朝がほの
つゆにむせべる花一つ
　野分ものうき秋の色
萩の上風こゝろあれ
　ふれなば落ちんつゆの玉
さはらば消ゑむつゆのまを
　しばし宿せやはぎの花

老人の言の葉

中村みさを子

老人の言の葉は聞き流すべからずと、古へ人も言ひ置れけむ、げに、さることぞかし。或日、便あり、母の言ひ付のまゝ、叔父がり、音づれぬ。叔父は進み行く御世に後れぬるも、鳥なき里の蝙蝠とや言はん、今は、里の長を勉む。一つ二つ言ひかはす内、蛛厩に妙なるを感じ、狐狸の故なき事など、いと、眞面目に話しければ、かたはらいたく覺ゑぬ。さて、種々話すうち、問うて言ふ樣、「世の中に風は西風東風人の心は梶の取樣」此の歌を知りぬるかと。今迄は、心労に、下すみ居たりしも、一時に眼さむる心地しぬ。かの、聞くも忌まはしき夫婦の中らひの悪しき、或は姑舅と宜しからぬなど、皆、この歌の意を知らず、梶の取樣悪きが故にて、はては、めあての港にも着を得で、歸り來り、世の人の笑をまねくに至りぬべし。老人の言の葉は、あながち、かたはらいたしとて聞かぬは、愚かとも愚なるべし。話のかぎり、心を留めて聞き、悪きは捨て善きを取り、取りては常に守るべし。老人の言の葉のみならず、何事にまれ、人は多く見、多く聞き、善きを取り、正しき道に進み行かん心得なかるべからず。

瀧見に行きて

關谷君子

夏の朝とく起きて、園に下りたちて眺むれば、空、心地よく晴渡りて、一ひらの雲もなし。あはれ、かゝる好天氣を空しく過さんもとて、皆々、打連れて、十二社さして出たつ、道すがら、つゝむかたなく打興じつゝ歩む程に、いつしか町をすきて、人のけうとき田舍路にかゝりぬ。木立茂れる細き道を、右へ左へと行けば、十二社近くなりて、瀧の音、先、耳にひゞきぬ。この瀧、さして大きくはあられども、水の落つること、絕間もなく、嶺さへ旋りたれば、暑さを覺もはず。女瀧男瀧を見終へて、稻荷の社に詣で、四方を見渡すに、何處の里か知られども、家毎に立つるけむりも、今年の豐けさ知られて、いと目出度し。こゝにも、又、瀧ありo先のよりは、遙かに勝れて、落つる水音のはけしさ、鳥の音も人のこゑも聞きわきかたきまてそある。

人こゑも鳥のなく音もさへられて
たゞ神瀧の音のみぞする

かくて、おのがじゝ、携へ來りし破子とりいてゝ、しはしこゝにやすらひ、日頃學ひのまとにて敎へられし唱歌などうたひ遊ぶ程に、ふと聞ゆる入相の鐘におどろきて、家路にかへりつきぬ。夕月のかけも、ものおそろしがるともがらを、見おくりたまはる心地せられて、いとをかしかりき。

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題

住所 姓名

………………
………………
………………

用紙は半紙半截の事。一題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所 姓名

……、……、……。
……。……、……。
……、……、……。
……、……。

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは沒書とす。

○女子は、なにひとにても、隨意に投稿することを得。

男爵高崎正風先生序 ◎ 本居豊頴先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和綴優美 自一巻至八巻 紙數壹千百頁 上中下 合三冊

全三冊 正價壹圓五拾錢 遞送料 四種郵便二錢○小包○十里迄七錢○百里迄十二錢○百里以外二十四錢

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書れはかるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃にゑり巻となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の栗田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り巻にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなからいと廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右一日も欠く可からざる最良書なり

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社 （電話新橋八八）

社告　女鑑毎月五日、廿日、發行

定價		
一冊	拾錢	送料　全國無逓
六冊（三ヶ月分）	五拾五錢	
十二冊（半年分）	壹圓	

代金　通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京新富町郵便受取所、受取人は東京築地貳丁目廿一番地國光社宛、郵券代用一割增

領收　別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるる方は別に證書郵送料又は端書封入の事

照會　編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」〇會計上に關する件は東京京橋區築地二丁目二十一番地國光社雜誌部宛照會は返信用切手封入若くは往復端書にあらざれば回答せず◎未納税の來書は一切受取らず

廣告料
一行（五號活字廿三字詰）金二拾五錢
半頁（二行三十詰）金六圓
一頁（二段六十行）金拾圓
料金は前納、位置は申込の順により組み込む

明治三十三年九月十九日印刷
明治三十三年九月二十日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
印刷人　東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木良雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　特（電話番號新橋八八）國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

寶石入指環



（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）

ダイヤモンド及キャツアイ入甲價八拾五圓●乙價
七拾五圓●全眞珠及チヤパール入甲價參拾參圓●乙
價參拾圓
ダイヤモンド入甲價參百圓●乙價貳百八拾圓
ダイヤモンド及眞珠入甲價百貳拾圓●乙價百圓
ダイヤモンド入甲價貳百圓●乙價百七拾圓
ダイヤモンド及エメラルド入甲價百五拾圓●乙價
百貳拾圓
ダイヤモンド及キャツアイ入甲價貳百圓●乙價百
七拾圓●全ダイヤモンド眞珠入甲價百八拾圓●乙
價百五拾圓
ダイヤモンド入甲價百八拾圓●乙價百五拾圓●全
ルビー及サツノアヤ入甲價五拾圓●乙價四拾參圓
ダイヤモンド入甲價五百圓●乙價四百參拾圓
眞珠入甲價參拾圓●乙價貳拾五圓
●市外遞送料金貳拾錢

此ノ外金又ハプラチナ地ニ種々ノ寶石ヲ裝嵌シタルモノ及彫刻品夥多有之候間御來車ノ上現品御一覽下サルカ郵便御注文ナレバ寶石入若クハ彫刻付等ノ區別ヲ指示シ代金御送附アレバ其價ニ相當ノ品ヲ精撰シテ調進スベシ若シ御意ニ適ハザル時ハ御購求當日ヨリ一週間（弊店商品中時計ニ限リ三十日間）以內ハ（府外ハ相當ノ往復日數ヲ加フベシ）凡ソ其物品ニ破損或ハ毀傷ナキニ於テハ何時ニテモ需ニ應シテ他ノ物品ト交換シ又ハ原價ニテ買戻シ聊カタリトモ其爲ニ手數料若クハ割引等ヲ加ヘサルベシ其他ノ手續ハ歷々各新聞紙ニ廣告スル所ノ弊堂店則ニ詳ナリ

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
（電話番號新橋三百三十三）
（長距離電話番號新橋三百三十三大阪東七百卅三）

時計及寶玉類貴金屬美術品商

天賞堂



妙技一等賞牌

東京神田小川町（電話本局二六〇）天賞堂小川町出張所
橫濱尾上町五丁目（電話八七六）天賞堂橫濱出張所
大阪心齋橋北詰（電話東七三三）天賞堂大阪出張所
名古屋市玉屋町二丁目 天賞堂名古屋出張所
廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂廣島出張所
熊本市上鍛冶屋町十番地 天賞堂熊本出張所
長崎市今鍛冶屋町四十番地 天賞堂長崎出張所
福岡市橋口町榮屋方 天賞堂福岡臨時出張所
北海道小樽色內町越中屋方 天賞堂小樽臨時出張所

（東京市京橋區築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷）